

はじめに

平成17年度の長岡造形大学デザイン研究開発センターの活動報告をいたします。

昨年度の7・13水害、10・23新潟県中越地震の復興も、雪が多かったとはいえ順調に進められ、徐々にではありますが、従来の落ち着きが見られるようになってきました。

本年度の当センターを省みるに、先ず、共同研究や共同開発の受託契約件数はこれまでで最も多く（受託件数20件）、ひとことで活動は順調に進められたといえます。

ここに改めて相談、依頼等にお出でいただきました方々に厚くお礼申し上げます。

当センターの活動内容や取り組み姿勢はもとより、ご依頼いただいたプロジェクトの進行プロセス、アウトプットのあり方、そのクオリティ、デザインフィー等について、具体的な内容が広くご理解いただけるようになってきたものと思っております。

当センターの目的である「企業等との共同研究を推進する事により、教育研究の発展と、地域社会における創造的研究開発の推進に寄与する」ことの成果は、厳しい見方をすればまだまだ十分とはいえませんが、自治体、公共団体、企業等からの問い合わせや契約にいたる数の増加のペースは、従来と大きくは変わっていないものの、その中身が濃くなってきている状況は明らかであり、この点は非常にうれしいことであり、自負もしております。

従来もありましたが、他県に就職した卒業生からの紹介でとか、本学のホームページから情報を得てその内容に魅せられとか、来訪された方の話には、開学10年を超える流れの中で着実な動きになってきたことに感慨を覚えるとともに、いよいよがんばらねばと勇気付けられ、気を引き締めているところです。

活動の詳しい内容はこの報告書をご覧くださいととして、あらゆる領域でデザインの重要性はますます強まり、その価値を導入するとしないととの差異が明確に現れてきているのが現状です。このような状況の中、当センターはデザインの必要性、重要性の理解をより強く求めていくことに変わりはありません。同時に、我々教員、学生とも、常に最先端の考え方をもってご依頼に応じられるよう、日々精一杯質の向上に努力していく所存です。

経済は、統計的には好況といわれますが、まだまだ実感が伴うものではありません。実感を伴う進展、それは自分たちで勝ちとらなければ誰かがやってくれるというものではありません。そう考えるとき、デザインの視点は欠かせない重要な要素です。

今まで以上に当センターを活用していただくよう、よろしく願いいたします。

平成18年3月

長岡造形大学
デザイン研究開発センター長
松 丸 武

1. 共同研究及び受託研究プロジェクト報告

受託事業名：

有形文化財等基礎調査委託

発注者：国分寺市

受託期間：平成17（2005）年4月1日～平成18（2006）年3月31日

プロジェクト主査：平山育男

プロジェクトメンバー：大橋一章（早稲田大学文学部教授）

プロジェクトのメンバー

本調査では建築調査を平山が、仏像等調査を大橋が
当った。なお、建築調査では本学1期生の田村収が建
築写真の撮影、本学デザイン研究開発センター研究員
の西澤哉子等が実測調査を担当した。

調査の目的と今年度の活動内容

調査では国分寺市内の近代以前に創建された寺院・
神社を調査対象として、建造物、絵画・彫刻・工芸品
の調査を行い、文化財指定に結びつけることを目的と
する。

調査は、平成14（2002）年度より4カ年で実地調査
を行い、5年目に報告書を作成する予定である。本年
度は平成17（2005）年4月22日に光町の稲荷神社、8
月4日に西恋ヶ窪の熊野神社拝殿、8月5日に東元町
の平安神社本殿、拝殿、10月27、28日に並木町の鳳林
院本堂、鐘楼、10月27日に北町の妙法寺本堂、平成18
（2006）年3月8日に西元町の八幡神社本殿、本殿覆
殿、拝殿の調査を実施した。

建築調査では調査台帳の作成、写真撮影、実測図作
成、間取り等の調査を実施し、仏像等の調査におい
ては、調査台帳作成、写真撮影、間取り等を実施した。

本年度の調査で判明したこと

建築調査で判明した点を中心にその概略を記す。

・光町：稲荷神社

光町周辺の旧称は平兵衛新田で、享保年間の開発者、
上谷保村平兵衛の名前に因むが、元文年間の検地以後
は榎戸新田の榎戸角左衛門が名主を兼任したとする。
なお、当神社の草創は兼帯名主を勤めた榎戸家の先祖
が西多摩郡大丹波村（現奥多摩町）から新田開発に出
た際、1匹の白狐に導かれ当地に辿り着いたことに由
来し、稲荷を祀った伝承がある。創立は「神社明細帳」
が享保10（1725）年、「北多摩神社誌」が享保12（1727）
年とする。祭神は倉稲魂命^{うがのみたまのみこと}。

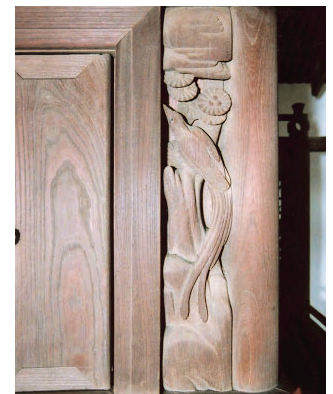
神社の住所は光町3-17で、境内は崖線の丘陵上下
に位置し、交差点に面して鳥居を開く。傍らに社票碑、
秋葉神社灯籠が建つ。崖線の下段には社務所と拝殿が
配され、上段に本殿及び覆殿、末社の八雲神社、御岳
神社及び不動明王の石造が祀られる。



稲荷神社拝殿全景 南より



稲荷神社本殿全景 南より



稲荷神社本殿脇羽目 南より

本殿は嘉永5（1852）年、覆殿、拝殿は境内前交差点改良工事に際し昭和59（1984）年に建築された。

本殿は一間社流造、こけら葺、南面の形式で正面柱間2尺4寸2分の規模とする。組物は和様出組（拳鼻鳳凰、括弧内は彫刻）、中備墓股（花）、軒は向拝を打ち越して二軒繁垂木、妻飾は虹梁（渦紋、渦、若葉）、軒支輪（波）、太瓶束、笈形に拳鼻（渦紋）2段で、拝み及び桁隠は猪目懸魚とする。縁は背面を除く3方に持送及び組物による形式で切目縁、背面柱筋に脇障子（牡丹）を建て、高欄3方、正面階5級とする。向拝柱は角柱で几帳面取、水引虹梁（木鼻獏）で固め、身舎頭貫高さと同水引虹梁高さをつなぎ虹梁（海老虹梁、渦紋、木鼻獅子）で固める。皿斗付三斗組の組物で、中備（籠）、手挟（菊）、向拝桁隠（菊）とする。内部は未見で材は桁までをケヤキ材、垂木以上はスギ材とし、塗装は行わず、各所に金具を打つ。

本殿は最下部の台が最近のものであるが、改造はなく、同時期の補修が一部に見られる程度である。彫刻絵様から判断して、幕末期、嘉永5（1852）年の建築と考えて妥当である。正面柱間規模2尺4寸程と小規模な社殿ではあるが、正面を中心に端正な彫刻で彩られ、保存状態もよい。

・西恋ヶ窪：熊野神社

熊野神社は府中街道の「西恋ヶ窪3丁目」交差点を東へ100m程進んだ旧鎌倉街道とされる通りに西面して鎮座する。敷地西面に石階段等を構え、社殿は西面し、南に神楽殿、北側に手水舎、太鼓庫及び境内末社の八雲、八幡、古峯神社が鎮座する。

社伝で当社は新田義貞の兵火で焼失して応永（1394～1428）年間に社殿再建、天正18（1590）年兵火により再度焼失し、慶長2（1597）年社殿再建再勧請され、延宝6（1678）年の検地では1反3畝1歩とされる（神社明細帳）。以後も、社殿が明治10（1877）年の暴風で倒れ、大正12（1923）年の関東大震災で大破し、加えて昭和20（1945）年の爆撃により大破したが、昭和41（1966）年に社殿を改築したとされる（北多摩神社誌）。祭神は伊弉諾尊、伊弉冉尊。

本殿は未見であるが拝殿は幕末から明治時代頃の様相を示すことから、明治10（1876）年における災害以



熊野神社拝殿全景 西より



熊野神社末社全景 南西より



熊野神社末本殿覆殿 西より

後の部材が用いられている可能性がある。

拝殿は正面3間、側面2間の入母屋造銅板葺正面軒唐破風付、西面の形式で、正面中央柱間10.5尺、脇間6尺、側面各間7.5尺、向拝の出は8.4尺の規模とする。縁廻りは人造石で、昭和41（1966）年の修理と考えるのが妥当である。身舎組物を中心とする部材はやや古く、絵様から江戸時代末から明治時代初期と考えてよい。つまり現社殿は由来にある明治10（1877）年の天災以後の建物と考えるのが妥当であろう。

・東元町：平安神社

平安神社は東元町1-28、元町通りから150m程北側に進んだ場所に位置する。社殿は市道に東面し、敷地東南に面し開き、鳥居、狛犬等を配する。参道の突き当たりに拝殿を始めとする社殿が鎮座する。祭神はきくりひめのみこと菊理媛命。

当社は従来、嘉永2（1849）年の創建とされていたが、後述のように今回の調査で嘉永元（1848）年における社殿の造営は再建であることが棟札の記載から判明し、これ以前に創建が溯ることが判った。また、かつては白山宮、白山神社と呼称したが、昭和21（1946）年に至り現称の平安神社へと改称したことも今回の調査で明かとなった。なお、言伝えによると当社は一時期、本村の八幡へ合祀され、後に分祀されたとする。

社殿は今回発見された棟札より嘉永元（1848）年の建築と考えるとよい。明治時代中期に社殿の改造を行ったとするが、屋根葺替えであろう。大正10（1921）年の屋根替棟札が発見され、昭和33（1958）年に屋根が現在のトタン葺に、平成6（1994）年7月には正面格子戸及び外壁の修理がなされた。社殿は三間社の本殿と、拝殿、本殿覆殿が一体の檜木形平面を持つ拝殿からなる。

本殿は正面3間（柱間5.7尺程）、側面1間、切妻造銅板葺正面向拝一間付の形式で背面を造らない三間社で覆殿に安置され、素木造とする。

拝殿は正面3間、側面2間で、背面に正面2間、側面2間の覆殿が接続する。基礎は自然石で、軸部は土台上に角柱を建て、切目長押、正面及び拝殿・覆殿境は水引虹梁で固め、桁を受ける。組物、中備はなく、せがい造で一軒疎垂木、正面の妻飾は漆喰壁で猪目懸



平安神社拝殿全景 東より



平安神社拝殿内部 東より



平安神社本殿 東より



平安神社発見棟札

魚、縁は正面にコンクリート製のものを設ける。床は縁甲板、天井は拝殿が格天井、覆殿が棹縁天井。柱間装置は正面腰付格子戸4枚建、拝殿 - 覆殿境は開放、外周は土壁で外部は化粧板貼。軸部はケヤキ材とする。

拝殿小屋裏小屋束に棟札が、棟木には幣串が打ち付けられていた。棟札は高さ1.54尺程、ほぼ同形状で、下から順に 嘉永元(1848)年、大正10(1921)年、

昭和33(1958)年の3枚あり、幣串は昭和33(1958)

年の銘であった。棟札はそれぞれ「白山宮」「白山社」と当社を称するが、裏には昭和21(1946)年に神社の名称を「白山神社」から「平安神社」へ改めた旨が記されていた。拝殿正面と覆殿境の虹梁に彫刻絵様があり、いずれも棟札に記される嘉永元(1848)年頃のものとして見て間違いはない。柱を始めとする軸組、せがい造の軒廻りもほとんどが当初材である。なお床は縁甲板張とするが、覆殿の下地板を留める釘には和釘が見出され、これらも当初材と判断された。以後、

大正10(1921)年の棟札は当初茅葺であった屋根の葺替を記録するもので、昭和33(1958)年にはこれを棧瓦葺に改め、その後現在見る鉄板葺に改めたとするが、現在棟に鬼瓦を頂くのはその名残りという。

今回の調査により社殿の建築が嘉永元(1848)年の江戸時代末に溯ることが確実となり、創建もそれ以前であることが判明した。地域が永年大切に守って来た結果が今日の成果を産んだ。今後の保存が望まれる。

・並木町：鳳林院

自得山鳳林院は並木町2-33-14、五日市街道の国分寺高校北交差点南東角に位置する黄檗宗寺院である。五日市街道と直行する南北の通りに西面して門を開き、東面して本堂、庫裏があり、境内東側に鐘楼、毘沙門天堂が配される。また、境内には葬祭場が置かれる。

本寺の創建は小平市の野中家文書等によれば享保10(1725)年に寺地が決められ、翌年に堂地取の絵図作成があり、上谷保村(現国立市)円成院に正徳3(1713)年に開かれた鳳林院を引寺し、毘沙門天が北野中より勧請されたとする。このように本寺は黄檗宗寺院の新田開発村における積極的な教化の例とされる。なお寺伝では18世紀前期、7代雪江真棹の時代に本堂の再興



鳳林院本堂・庫裏全景 南東より



鳳林院本堂内陣 南東より



鳳林院本堂内陣 天井

があり、中興の称号を与えたとする。また、維新後は稲城市にあった黄檗宗光明院が合寺され、歴代住職の位牌をはじめとする寺物が鳳林院に納められた。

本堂は東面し、入母屋造本瓦葺型銅板葺の形式で、正面7間半、側面6間の規模を有し、六間取で正面に向拝を設け、正面及び北側面に廊を廻す。平面は中央表側から外陣（15畳）内陣とし、須弥壇両脇を位牌壇などとする。外陣両脇に10畳を置き、南側奥は6畳の位牌間、北側奥は床、書院を有する8畳とする。構造はやや高い基壇上に土台を巡らし、柱は来迎柱が円柱である以外は角柱で、これを切目長押、内法長押等で固める。なお、正面各間、正面縁 - 外陣境、内 - 外陣境、来迎柱筋、位牌壇柱間などは虹梁で固める。外周は組物を舟肘木で中備はなく、桁を受ける。向拝は階8級で、建物とはつなぎ虹梁でつなく。向拝柱は水引虹梁で固め、三斗組、中備幕股。内部は内 - 外陣境、来迎柱筋に台輪、三斗組で支輪を配す。正面及び南面に切目縁を配し、高欄を廻す。床は内陣が拭板敷で、他室は畳敷詰、天井は内陣、外陣が龍の絵を持つ鏡天井で、10畳、位牌間が棹縁天井、8畳は格天井とする。軒は二軒半繁垂木で、妻飾は木連格子とする。

建物は昭和27（1952）年に屋根をそれまでの茅葺から棧瓦葺に改め、更に昭和63（1988）年、現在の本瓦葺型銅板葺に改め、この際、基壇、縁、高欄も整備を受けた。なお、北側縁はこれよりやや早く、庫裏を整備した昭和40（1965）年頃の整備と考えられる。

建築年代を直接示す資料は見出せなかったが、鐘楼は天保11（1840）年銘の梵鐘を下げ、その当時の建築と考えられるが、本堂はこれに類似する建築絵様を持つことから、建物は同時期頃の建築と判断することが可能である。いずれも今後の保存が望まれる。

・北町：妙法寺本堂

瑞雲山妙法寺は曹洞宗海禅寺末の寺院で、五日市街道の国分寺高校北交差点に北西角に位置する。五日市街道に面して薬医門形式の門を構え、本堂、鐘楼と市指定重宝の「川崎・伊奈両代官謝恩塔」を配する。

妙法寺はもともと小平市小川1丁目にあった寺で、維新後、明治42（1909）年、棚沢村（現在の奥多摩町古里）の法正院と併せ、榎戸家の墓所、希運庵の場所



鳳林院本堂 襖絵 東より



鳳林院鐘楼全景 北西より



妙法寺本堂外陣 南より



妙法寺本堂全景 南より

に移転したものである。

南面する本堂は入母屋造本瓦葺型銅板葺の形式で、規模は正面8間、側面7間半で、六つ間を基本とする。周囲3方に廊下が廻り、背面に位牌堂が取付く。

建物は昭和42（1967）年建築、平成8（1996）年に周囲縁を室内化し、背面に位牌堂を設ける。

・西元町：八幡神社

八幡神社は祭神を応神天皇とし、国分寺崖線に沿い、国分寺の西隣に位置し、享保5（1720）年、現在地に於て社殿を新造したとされる。

本殿は南面し、一間社流造こけら葺の形式で、覆殿床上に安置される。木製台上に丸柱を建て、出組、中備は透葺股、二軒繁垂木で妻飾は、虹梁、葺股とする。縁は3方切目縁、正面階5級で浜縁、浜床、背面に脇障子とする。向拝は海老虹梁でつなぎ、柱間装置は側面及び背面横羽目、正面小壁に幣軸構、板戸とする。材料は軸部ケヤキ、垂木以上スギ材とする。内陣及び基壇廻りは明治時代末頃の修理が想定される。建築年代を示す資料は残らないが、彫刻絵様の渦紋は隣接する国分寺薬師堂に類似し、18世紀後期における関係する大工集団の関与も想定される。

本殿覆殿は正面3間側面2間、切妻造平入の形式で鉄板葺とする。自然石積基壇で礎石自然石、軸組は土台上に角柱を建て、貫4通で固める。材料はスギ材を用いる。建物には和釘の使用がなく、彫刻絵様が拝殿に類似することから、拝殿と同時期の明治時代後期の建築と推定される。当初外周は柵状に板が打たれ、床は土間と推定され、墨書にある昭和38（1963）年4月、現状の板壁、拭板敷に改造、幣殿が造られた。正面石階等が残り、当初の形式を知ることができる。

拝殿は正面3間側面2間、切妻造正面千鳥破風、向拝軒唐破風付鉄板葺の形式である。軸組は土台上に角柱を建て、切目、内法長押で固める。組物、中備はなく、二軒半垂木、妻飾は虹梁と束で、3方切目縁正面階2級の形式。向拝は身舎と向拝水引虹梁（木鼻渦紋、側面渦紋、若葉渦）を海老虹梁でつなぎ、組物は連三斗、中備葺股。菖蒲桁（渦紋、若葉渦）床は拭板張で豊敷詰、棹縁天井とする。記録は未見であるが、彫刻絵様より、明治時代末の建築と考えるのが妥当。



八幡神社本殿覆殿、拝殿全景 西より



八幡神社本殿全景 南東より



八幡神社内陣内部 南西より

受託事業名：

工業デザインのコンサルタント指導

発注者：株式会社ニイガタマシンテクノ

受託期間：平成17年4月1日～平成17年9月30日

プロジェクト主査：松丸 武

プロジェクトメンバー：松丸 武

デザインコンセプト

デザインコンサルタント契約を結び、毎月1回本社に伺い、(株)ニイガタマシンテクノが開発する全製品に関し、デザインの視点からみている。このプロジェクトは、その中の1機種、マシニングセンターの外装と配色のデザインを進めてきたもの。デザインコンセプトは次のとおりである。

機能の先進性、精度感、信頼性等を表現する。

単純明快で最新の技術を表出する造形とし、製造、加工に無駄な経費をかけない。

マン・マシンインターフェイスデザインを徹底する。(作業者、操作者とマシンとの関わり方を明快にゾーニングし、ヒューマンインターフェイスを追求する。)

操作盤の細部にいたるまで、ユーザーインターフェイスデザインを考慮する。

設置される環境を考慮し、清潔で明るい作業環境をマシン側からも提案する。

他社との差異化を明確にし、業界を牽引するマシンデザインのリーディングカンパニーを標榜する。

開発機種毎にデザインするのではなく、コーポレート・アイデンティティ、プロダクト・アイデンティティを考慮した継続性のあるシステムデザインとする。

これまでよりデザインを洗練し、あわせてコストリダクションを行う。

デザインの現状

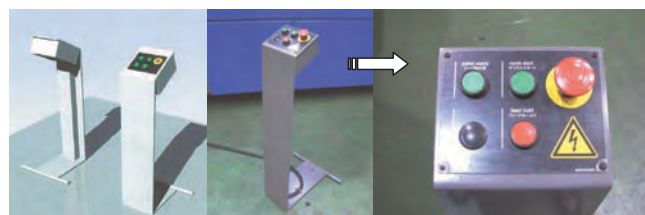
機種ごとに仕様が変わる状況の中で、デザイン開発は可能なところから実現している。現在も継続中であり、写真はその第一段階の機種である。スムーズにコンセプトにうたった目標に向かって進行しているといえる。

写真の機種について、技術部機械設計課の田村課長は、デザインの特徴を広報誌に次のように唱っている。

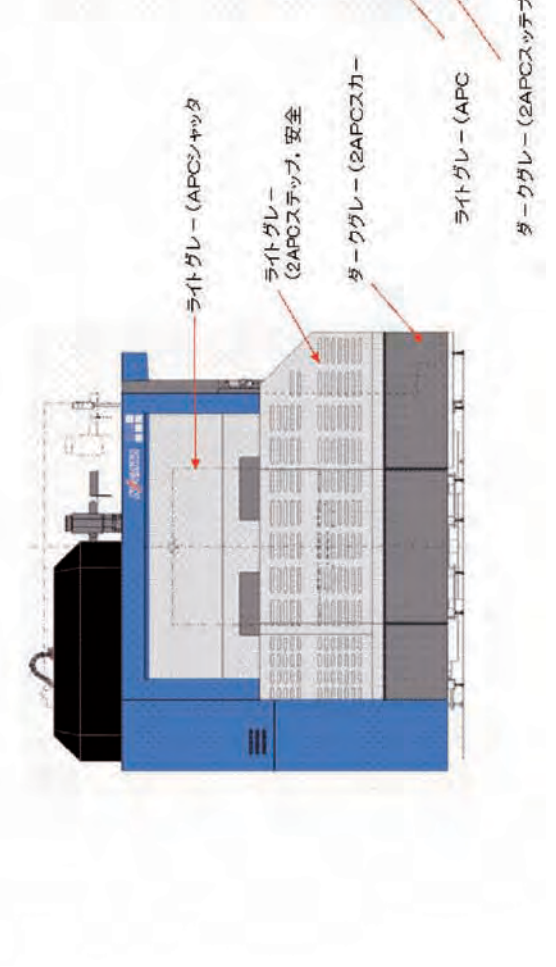
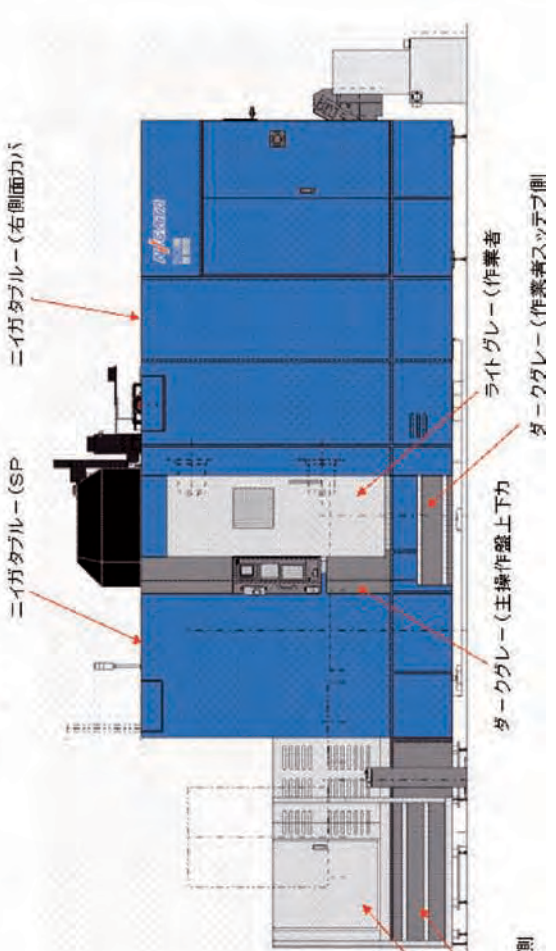
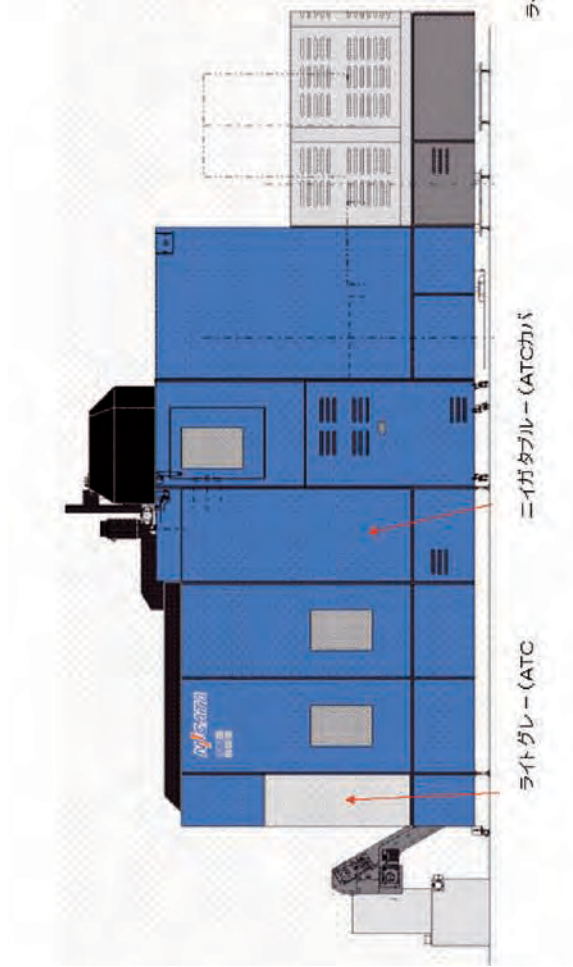
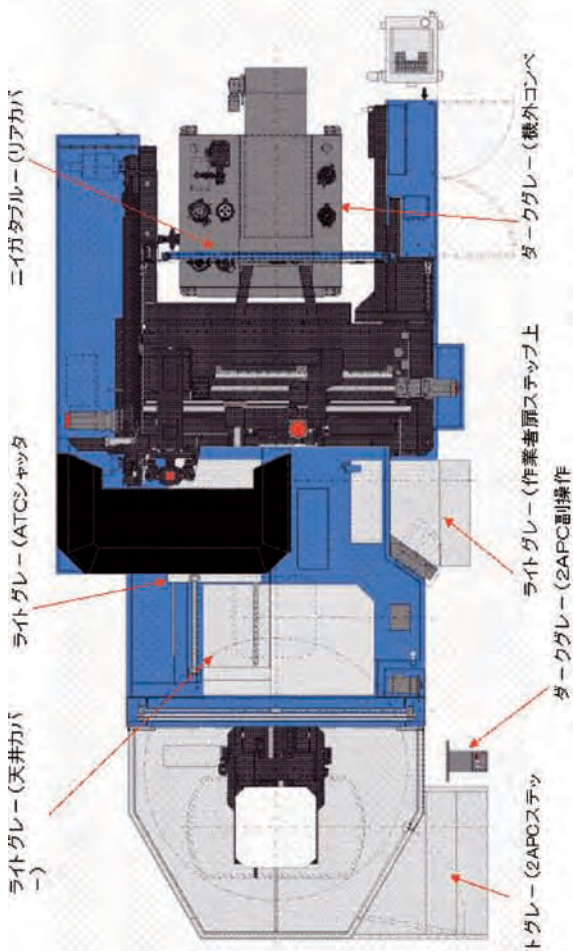
カバー接続面を凹形状とすることで、ボルトの突出しと穴ピッチ誤差を解消し、広平坦面にアクセントをつけた。

2APC廻りのステップと安全ガードは、横方向への広がりと操作・段取り作業の流れを意識したデザイン。

日本海をイメージさせるニイガタブルーが全体を引き締め、ステップや作業台は人に優しい明るい配色。操作パネルとそのスタンドは、ヒューマンインターフェイス、アフォーダンス(認知心理学)を具体化した。



(写真・図面は株式会社ニイガタマシンテクノ提供)



受託事業名：

巻町『鯛車』復活プロジェクト

発注者：巻町観光協会

受託期間：平成17年4月1日～平成18年3月31日

プロジェクト主査：澤田雅浩

プロジェクトメンバー：野口基幸（長岡造形大学研究員）

委託内容

新潟県巻町（現在は新潟市）に昔から郷土玩具として伝わる竹と和紙でできた「鯛車」を復活させるために、制作技術の確立及び普及を目的に調査・研究業務を行った。

「鯛車」は、かつてお盆の頃になると子ども達が家のまわりを引いて歩いていたが、その習慣も時代が進むに連れ途絶えてしまった。昭和50年代には地元の職人が過去の記憶をもとに鯛車を復活し、夏祭りにパレードを行ったが、現在はパレードも行われなくなってしまった。

そこで、今回本学卒業生であり卒業制作で「鯛車」の制作を行った研究員の野口基幸をプロジェクトメンバーに加え「鯛車」の復活に取り組んだ。

また、地域の活性化に繋がる活動が認められ、モスバーガーが主催する「モス夢チャレンジ2005 ワクワクタウン大作戦」にて審査を通過し、認定されるに至った。

以下に、詳細な活動報告を掲載する。

2005 鯛車復活プロジェクト 活動報告



越後
巻町 鯛車



2005. 5. 18～7. 20
巻南小学校総合学習

巻南小学校の5年生72人が伝統の形を残しつつも個性的な18台の鯛車を作り上げました。



2005. 6. 19～7. 31
巻町公民館鯛車ワークショップ

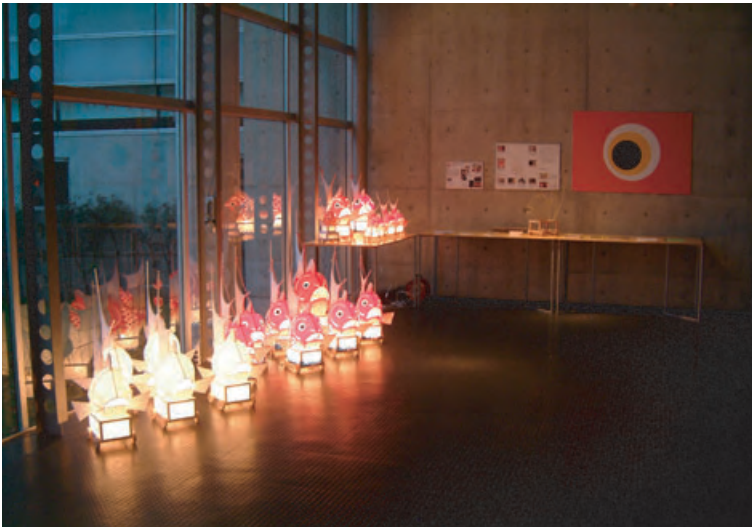
一般の方を対象にした鯛車の制作教室を行いました。12歳から上は70歳という幅広い年代の方たちが集まり、年配の方は昔を懐かしみ、若者は巻にこんな文化があったんだと考え真剣に取り組みました。



2005. 8. 6～8. 14
鯛車展

巻町に残存する鯛車と小学生、一般の方が作った鯛車、合計80台を展示しました。1週間で1000人もの方に来場いただき大好評でした。初日とお盆の13日は子供たちが夜30台の鯛車にろうそくを灯してお墓のあるお寺まで引っ張りました。





■ 11月7～13日まで造形大ギャラリーで行った展示の様子。 大小合わせて20台を展示しました。



モス夢チャレンジ
ワクワクタウン大作戦

審査期間
2005年8月～12月

これはモスバーガーが、まちづくりなどで活動している団体に活動支援を行うという企画です。全国から337チームが参加し昨年の9月に一次審査、11月に二次審査、12月に最終審査を行い3チームが選ばれました。私たちのチーム「よみがえれ！鯛車」は最終まで残りなんとそのひとつに選ばれました。今年の2月から全国のモスバーガーで活動を発表するポスターが展示され、公式ホームページでも詳細が発表されました。今後も小学校や公民館などで教室を行い、お盆時になったら町全体を鯛車の赤で真っ赤に染めることが私たちチームの夢であり目標です。



■ 環境デザイン学科2期生の皆川俊理もメンバーの一員として参加。



■ 選ばれた3チームとモスバーガー役員による記念撮影。

受託事業名：

長岡東山福祉会新拠点施設建設プロジェクト 「新拠点施設建設計画の事前調査・研究業務」

発注者：社会福祉法人長岡東山福祉会かつぼ園

受託期間：平成17年9月26日～平成18年3月31日

プロジェクト主査：新海俊一

プロジェクトメンバー：新海俊一（環境デザイン学科・助教授）、飛田範夫（同・教授）、藤澤忠盛（同・講師）、

星野新治（デザイン研究開発センター・研究員）、佐々木一成（工房職員）

業務内容

受託内容は、以下の各機能を集積した中規模多機能型高齢者福祉施設の計画、設計の事前調査・研究業務である。

- (1) デイサービスセンター
- (2) グループホーム
- (3) 在宅介護支援センター
- (4) 生きがい支援センター

斜面を含む計画対象敷地の立地条件を生かし、豊かな眺望を楽しめる配置空間、園芸福祉（フラワーセラピー）が実践できる庭園計画が特に求められた。

計画概要

1 施設概要・規模

本プロジェクトは長岡市郊外（水穴町）の東西方向に約13mの高低差を持つ傾斜地において、下記の3施設機能から構成される複合型高齢者福祉施設の計画である。

- (1) デイサービスセンター：重介護デイサービス利用者20～25人、介護予防デイサービス利用者20人の合計45人を予定。
- (2) 生きがい支援センター：センターホール、クラブ室、リハビリプール、作業室、ボランティア室、入浴施設、食堂、ラウンジなど多目的機能を有し、居宅介護支援センターとヘルパーステーションを併設する。
- (3) グループホーム：1ユニット9人×2ユニットの合計18人を定員とする認知症高齢者の入居を想定した施設。

『花』と『華』をテーマとして園芸や美容を運営プログラムに積極的に取り入れた生きがいづくり、介護予防、機能回復などの活動を展開する、地域密着型の画期的な拠点施設を目指す。延床面積約2,500㎡、建築面積約1,600㎡の規模で計画する。

2 複合化の意義

1) 複合化の意義

複合型高齢者福祉施設を計画することの意義は、一般に高齢者施設の質的整備、地域福祉の向上、世代間交流の促進である。では、高

齢期の安定した生活拠点の確保を支えるシステムづくりをはかることで、在宅サービスと施設サービスの統合、福祉と医療の相互連携など、高齢者に対する包括的なサービスの提供を意図している。では、在宅高齢者に対する福祉サービスと他の福祉サービスを総合的・一体的に提供することで、多様で高度化する高齢者のニーズに対応できるシステムを構築することを意図している。では、高齢者の孤立防止のため、日常の暮らしの様々な場面で高齢者と子供をはじめとする多世代の人々との交流機会を生み、自然中館での交流を誘導することを意図している。

2) 複合化の注意点

施設機能相互の相性を見極め、それぞれの施設機能に支障が生じない様に計画を進めることが重要である。各施設の設置目的、利用者、利用方法、利用形態、構成諸室など、施設相互の親和性を理解し、複合化の提訴を検討すべきである。高齢者施設同士は一般に親和性が高いが、居住系施設との複合に際しては、特に生活の場としての安全性や快適性に十分配慮した計画が求められる。また、世代間の交流を促進するためには、施設利用者（入所者、通所利用者）や周辺地域の住民、高齢者ばかりでなく、都心居住者、子供、若者など多世代の人々との交流機会を誘導する仕組みと場が提供されることが必須条件である。

3 配置計画

- 1) 複合施設に含まれる複数の施設機能が空間形態としてどのように接合しているかを整理すると、同一敷地内にあるがそれぞれの施設機能が建物として独立している形態（分棟型）、同一建物内で複数の施設が一体的・複合的に計画されている形態。
- 2) さらに、上記の は異なる施設間の空間接合形態によって「並列型」、「積層型」、「混在型」、「一体型」に分けることが出来る。
- 3) 本計画は大きく3つの施設機能からなる複合施設であるため、3つの建物からなる分棟形式と3つの施設機能が一つの建物内に存在し、出入口の

共用化、複数の施設機能による共有空間の存在が複合形態をとらえる計画要素となる。

- 4) 一般に複合型の高齢者施設は居住系と利用系、高齢者福祉施設をはじめとする福祉施設同士が複合するパターンと福祉施設がその他の施設と複合するパターンという2軸の組み合わせでとらえることができる。
- 5) 本計画では、居住系としてグループホーム、利用系としてデイサービスセンター、在宅支援センターが含まれているが、いずれも高齢者福祉施設であり、福祉施設以外の機能との統合はない。
- 6) 通所利用者向けの施設機能はデイサービスセンターや生きがい支援センターであり、居住利用者向けの施設機能はグループホームである。
- 7) 通所利用施設では要介護度が低い利用者（いわゆる元気老人）も想定していること、また主に認知症の入所者を想定するグループホームを併設していることから、要介護度の高い利用者（虚弱老人、要介護老人）と動線や利用空間の切り分けを考えがちであるが、属性の異なる利用者を敢えて交差流動させることで偶発的な出会いが発生し、「世代間交流の促進」をはかることが可能である。
- 8) また、計画対象地が傾斜地であるため、土地造成量を最小限にとどめ、同一規模ながらも相対的に建設コストが圧縮できるよう、建築面積（建坪）を抑制することが必要である。
- 9) 上記を考慮すると、現在計画中の統合型でコの字の平面を持つ部分2層型中庭付き形式の配置が最適と考えられる。この配置形式の利点は、次の通りである。グループホームを除く2つの主要施設機能に関してはエントランスやホール、食堂などを共有空間として利用できる、単独法人による運営であるため施設の一体的利用が可能である、中庭を設けることで周辺住民からとかく閉鎖的に感じられがちな高齢者施設を地域に開かれた施設という印象を持たせることができる、傾斜地と良好な景観を生かせる施設配置が可能、低層で建築面積が小さな平面計画が可能となるため動線が短縮される。

4 平面計画

施設建物内の各部門については、「高齢者、身体障害者等が円滑に利用できる特定建築物の建築の促進に関する法律（通称「ハートビル法」）」（以下単に「ハートビル法」と記する）の誘導的基準に定められた要件を満たすことに加え、方位や利用者動線、他の諸室との連携などをふまえて下記の各事項に留意した平面計画を行う。また、さりげない居場所、利用者ごとに異なる居心地がよい場所を提供するため、様々な場面、出会いを誘導する空間的仕掛けを組み込む。一方、グループホームは「自宅でない在宅」を実現するために、入所者がこれまで長く暮らしてきた自宅と比較して違和感を覚えないように暖かみがある木質系素材を外装に用いる。

1) 共通利用部分

本計画施設全体で各部門の利用者が共用可能な空間である。ただし、日常的な利用者は主にデイサービスセンターや生きがい支援センターの通所利用者と考えられる。

エントランスホール

- ・ 建物東側には主にデイサービスセンター、生きがい支援センターの通所利用者および一般来館者向けのエントランスを設ける。
 - ・ エントランスには車寄せを設け、送迎車輛や身障者の自家用車によるアクセスを考慮する。
- ##### ロビー
- ・ 外部との接点となるテラス（仮称「生きがいテラス」）建物内部からアクセスできる。
 - ・ 軽食コーナーの延伸として、飲食が可能なテーブルセット、ソファを設置する。
 - ・ 研修室兼会議室の前室（客だまり、休憩スペース）として機能する。
 - ・ 建物東側に向かって解放された空間。

汎用クラブ室（2F）

- ・ 理美容サービスや文化サークルの活動に対応する汎用クラブ室。
- ・ 可動間仕切りでロビーラウンジと接続、分割が可能。
- ・ 地域の集会・会合等での利用に対しても解放する可能性がある。

- ・ 中庭越しに良好な遠景を楽しめるようにエントランスホール、クラブ室、中庭は視線の縫い取りが可能な開口部で接続する。

- ・ デイサービスセンター、生きがい支援センター、グループホームの全体行事に活用できるよう、機能的にも配置的にも全ての等の中心に計画する。

ロビーラウンジ

- ・ 一般来館者、通所利用者を問わず、気軽にくつろぎながら利用できるラウンジ。
- ・ 来館者にとってのフロントエンドとして機能する。

- ・ 雑誌、新聞、書籍などを備え、読書室としても機能する。

- ・ 地域交流スペースとの連絡階段を設け、一般来館者のアクセス動線を確保する。

軽食コーナー

- ・ 一般の利用者が軽食をとることが出来る空間。談話空間としてのロビーラウンジや食堂の機能を補完する。

- ・ 厨房は食堂と共通利用とする。

研修室兼会議室

- ・ 施設内のミーティングや研修に使用するほか、テラスやロビーと連携して地域に開かれた集会施設としても機能する。

- ・ テラスに面した明るい室内で、活動の様子が外部からもよく分かる。

- ・ 一般来館者にも所在が分かりやすい箇所に計画する。

- ・ 公開プログラムなどで隣接する生きがい作業室と連携した利用にも対応できる。

中庭、ウッドデッキ

- ・ コの字型の建物で囲まれた領域を中庭とし、花壇、菜園を整備する。

- ・ 中庭と建物の接する部分にはウッドデッキを取り回し、外部で過ごしやすい季節は中庭に出て、日光浴や花壇、菜園の鑑賞、栽培作業を行える場を設ける。

地域交流スペース

- ・ 中庭に面して計画され、大きな開口部を持つ

開放的な空間。

- ・ 市民との共同プログラムや公開ワークショップなどの活動空間として利用できるほか、ギャラリーの様な展示空間としても利用可能。

- ・ グループホーム棟とデイサービスセンター、生きがい支援センターとの連絡通路を兼ねており、緊急時は中庭への避難経路としても利用する。

- ・ 中庭のウッドデッキと同じ床仕上げ材を引き込み、大ガラスの窓の内外が一体となった空間を構成する。

2) デイサービスセンター部門

介護予防での利用者および要介護度2～5の利用者を対象とする通所型介護施設である。後者については運動能力に障害を抱える重介護の利用者が多いと予想されるため、車いす使用の利用者の障害とならぬよう、「ハートビル法」の誘導的基準にしたがう他、出来る限り移動が同一階で完結するよう、2階に主要な施設を計画する。デイサービスと予防デイサービスは隣接し、同一の施設を共用する。

食堂兼機能回復訓練室

- ・ 要介護度の異なる利用者の利用に対応できるよう、低めのパーティションで緩やかに区画される。

- ・ スタッフルームや静養室、介護浴室、クラブ室と近接し、デイサービス利用者の活動拠点となる。

- ・ 運動機能回復訓練に適するよう、線形な空間として計画される。

- ・ 区画された食堂の各エリアには近接して洗面台が設置される。

- ・ 身障者対応のトイレを近接して設置する。

厨房

- ・ 施設全体の厨房として計画し、配食サービス提供の可能性もある。

- ・ 食堂と軽食コーナーの境界部分に設置され、合理的な配食が可能。

- ・ 厨房区画内に職員専用のトイレ、更衣室が設置されており、配食専任職員の動線が単純化さ

れている。

- ・ ロビーラウンジにも近接しており、軽食や飲み物のサービスが可能。

EVホール

- ・ デイサービス部門のフロントエンドに位置し、動線を明快にするとともに、おもに1階北側に配置される生きがい支援部門との連携をスムーズにする。
- ・ ハートビル法（誘導的基準）に対応するべく、乗降ロビーに電動車いすが転回可能な広さ（180×180cm）を確保する。
- ・ 階段室と隣接してEVを設ける。

クラブ室（2F）

- ・ デイサービス部門に配置され、当該施設利用者のサークル活動等に利用する。

静養室

- ・ スタッフルーム、食堂、介護浴室に近接して設置される。

特殊浴室・個室浴室（2F）

- ・ デイサービスセンター、生きがい支援センター棟の西側端部に位置し、入浴中に窓から良好な景観を楽しめるように計画する。
- ・ 西側端部は南北面の外壁が西側外壁面から筒状に突出する形状となっているため、西側に開口部を設けても接道面や中庭からの視線を避けることが出来る。

3) 生きがい支援センター部門

主に元気高齢者や虚弱高齢者を対象にした生きがいづくり、介護予防の中心施設として計画する。施設外部の支援者との連携も含めて、高齢者の生きがいを増進するとともに介護予防、機能回復の実効性を高め、在宅ケアの継続支援をはかるための施設機能を計画する。

在宅介護支援センター・相談室・ヘルパー室

- ・ エントランスホール直近の南東に集約される管理部門に計画する。
- ・ 在宅介護支援センターは相談室、ヘルパー室を包含し、ボランティア室に近接するため、外部支援者との連携がはかりやすい。
- ・ 相談室は応接室共用とし、空間稼働率を高め

る。

生きがい作業室

- ・ ロビーラウンジ、汎用クラブ室、研修室といった施設共通利用の空間と連携して利用される小規模な空間。
- ・ 具体的な用途は未定であるが、外部支援者と共同での活動に利用できるように、エントランスホールとの連絡が俵一に計画。

クラブ室（1F）

- ・ いわゆる元気老人を主な対象として想定し、健康状態を維持して介護予防をはかれるようなマシントレーニングやスポーツリハビリが可能な体育系活動のための空間とする。
- ・ 指導員室を設け、健康相談やトレーニングメニューの作成支援を行う。

農作物加工室

- ・ 園芸を施設運営プログラムに盛り込むため、屋内での花苗手入れや観賞用植物の栽培作業に供する空間を設ける。
- ・ 中庭に接し、採光条件も良好なため、冬季の野外活動が制限される期間でも園芸作業を実施することが出来る。
- ・ 単に農作物の加工作業を行う場であるばかりでなく、中庭に面するウッドデッキから直接アクセスできるため、室内での活動が中庭から眺められる。
- ・ 農作業に必要な用具や資材は屋内の収納庫に保管される。

温浴室

- ・ 機能回復訓練や介護予防のために利用する温水リハビリプール、シャワーブース、休憩スペースを備えた空間。
- ・ プール内にはスロープと手すりが配備され、水中歩行訓練が可能。
- ・ 男女共用のため、水着着用での利用を想定する。
- ・ 更衣室は男女別の一般浴室に付属の脱衣室を使用する。
- ・ 温浴室内は水着着用のため、室内から中庭を眺めることが出来る。

- ・ 温浴室内で使用する器具は同室内からアクセスできる器具庫に収納する。
 - ・ プール用機械設備（ポンプ等）が収められる機械室には温浴室内からアクセス可能。
 - ・ プールは消毒設備を備えるる過循環方式を用い、追い炊きで温水を供給するため、全水入れ替えを行わず、感染症を防止しながら保守・メンテナンス性と経済性を高めることができる。
- 一般浴室（1F）
- ・ 主に予防デイ利用者を対象とする男女別の浴室。

- ・ リハビリプール使用時でなくても入浴が可能。
- ・ 中庭に面する女子浴室の前面には光庭が設けられ、中庭からの視線を遮りながら、豊かな採光が可能。

- ・ 男女ともに脱衣室内にトイレを設け、浴室利用者の利便性を高める。

談話スペース

- ・ 一般浴室の前部に中庭に向かって開口部を持つ小規模な談話スペースを設ける。
- ・ 温浴室内の休憩スペースがリハビリプール利用者向けの水着着用で利用する空間として計画されているのに対して、この空間は一般浴室利用者が入浴後に休憩するために設けられる。

4) グループホーム部門

主に認知症の高齢者を対象として「自宅でない在宅」を実現するため、ユニットケアシステムを柱とする居住施設を計画する。定員9人のユニットを2ユニット設ける。

居室

- ・ 入所者の個室。（面積約20㎡）
- ・ 浴室は個別に備えないが、各室独立のトイレを完備し、プライバシーに配慮する。
- ・ 洋室仕様であるが、入所者の希望により、置き畳を用いることができる。
- ・ 作りつけのクローゼットや押し入れを備える。
- ・ 個人の持ち物を出来る限り持ち込むことができ、就寝以外の個人活動が出来るよう、約8畳の居住空間を確保する。
- ・ 認知症の入所者は個室での活動時間が相対的

に少なめのため、採光条件や方位については必要以上に意識せず、穏やかな採光条件を持つ個室と豊かな採光条件を持つ個室があるものの、これらを配置計画上、強く意識しないものとする。

食堂、居間

- ・ 認知症の入所者が日中、最も長く滞在し、活動する空間であるため、食事だけでなく団らん、交流の場となるよう、広めの空間とする。

- ・ 食堂は椅子利用とするが、居間は小上がり型の和室として計画し、異なる作法での利用に対応する。

- ・ 食堂と厨房の間に壁を設けず、入所者が気軽に調理に参加できる空間を目指す。

E Vホール

- ・ 入所者の多くは認知症であるものの運動能力に障害を持たず、基本的に入所者が異なるユニット間を移動することはないため、エレベータの利用は主に職員による荷物の移動、ごく少数の車いす利用者のみと考えられる。

- ・ 階段室と一体のE Vホールとし、壁面には採光のための大きな開口部を設ける。

- ・ 「ハートビル法」の誘導的基準に準拠する180cm x 180cmの広さを確保する。

浴室、脱衣室、洗濯室、リネン室

- ・ 入所者の生活拠点である食堂、居間に近接して計画する。

- ・ 汚物処理機能を含めた洗濯設備を脱衣室内に設ける。

- ・ トイレは食堂、浴室のいずれからも利用できるよう、ブースを2つ設ける。

ショートステイ室

- ・ 体験入所を受け入れるための空間として計画する。

- ・ 間取りは入所者の居室と同水準の面積、設備で構成される。

クラブ室

- ・ 入所者の個人または全員での活動以外に用いる空間。

- ・ 用途については不確定要素が多いため、目的

を精査して場合によっては除去する。

談話スペース

- ・ 食堂、居間はユニットの大多数が利用する空間であるため、プライベート空間である個室と、食堂や居間のようなパブリック空間の中間領域としてセミパブリック、セミプライベートなスケールの談話スペースを設ける。
- ・ 想定する利用者数は2、3人程度。
- ・ ライトウェル(光庭)に面した開口部を持ち、食堂や居間に身の置き場のない入所者にとって居心地の良い空間となるべく設けられる。

5) 管理部門

事務室

- ・ 施設建物東側2Fのエントランスホールに接して設けられる。
- ・ 受付カウンターを備え、通所利用者や一般来館者の受付、案内を行うインフォメーション機能も果たす。
- ・ 在宅介護支援センター、ボランティア室など、外部協力者との接点となる諸室を隣接させる。

職員休憩室

- ・ 男女別に設けられる介護職員の休憩用空間。
- ・ 相対的に女性職員の方が多いため、面積は女性職員休憩室の方が大きめとなる。

スタッフルーム

- ・ 静養室に隣接し、スタッフが食堂に滞在する利用者 と静養室の利用者とを同時にケアすることが出来る。

グループホーム事務室、宿直室

- ・ 本計画では統合型の建物配置形式をとるが、グループホームはエントランスを含めて基本的に独立した居住、活動の場を保つため、当該施設管理の拠点としてデイサービスセンター・生きがい支援センター棟とは別に事務室を設ける。
- ・ グループホーム固定の担当職員用の居室として宿直室を設ける。
- ・ ただし、グループホームの平面構成が変更された場合、事務室および宿直室の配置が変更され、あるいは除去される可能性がある。

- ・ 事務室は外部からの訪問者に対応するため、エントランスに近接して計画され、受付カウンターを持つ。

作業員休憩室(1F)

- ・ 農作物加工室での活動のサポート職員の休憩室として計画される。
- ・ 管理部門諸室に属し、生きがい支援センター部門の設備管理パネルを配備する。

5 意匠、ディテール

1) 外装仕上げ材料

施設らしさを払拭するため、デイサービスセンター、生きがい支援センターはコンクリート下地にガルバリウム鋼板仕上げを施した現代的デザインを取り入れ、マーケットが競合する周辺地域で他に類を見ない先進的な事例となることを目指す。一方、グループホームは「自宅でない在宅」を実現するために、入所者がこれまで長く暮らしてきた自宅と比較して違和感を覚えないように暖かみがある木質系素材を外装に用いる。

2) 内装仕上げ材料

デイサービスセンター、生きがい支援センターでは安全性や快適性を確保するとともにシックハウス対策に配慮しながら高齢者ばかりでなく、高齢者以外の世代にとっても魅力的な空間を目指し、現代的な素材を用いて構成する。また、グループホームでは木質系の素材を多用し、暖かみのある空間を構成する。

3) 景観に対する配慮

冬季の降雪時にはあたかも建物が雪に覆われた白銀の斜面に飲み込まれたかの様に調和した風景を作り出す。中庭には夜間の屋外照明を設置し、ライトアップによって地域の人々の目を楽しませるとともに、周辺地域の防犯にも寄与することを目指す。

6 構造計画

立地条件、気候・風土に配慮し、耐震性と経済性を高い次元で両立するための構造計画を行う。

1) 主体構造

多湿・寒冷地、豪雪地帯という気象条件を考慮し、耐雪性、耐候性の高い鉄筋コンクリート造（一部鉄骨を利用）2階建て、耐火構造とする。

2) 架構形式

デイサービスセンター、生きがい支援センターを含む主要部はラーメン構造。グループホーム棟は壁構造とする。

3) 基礎・地業

敷地の高低差を生かした断面構成のため、土留め壁を兼ねた鉄筋コンクリート造の基礎を想定する。

7 設備計画

空気調和設備については深夜電力利用による全床暖房とセントラル式・ファンコイルユニット式併用型冷暖房を組み合わせる。空気調和設備、給湯設備の熱源は灯油と電気を主とし、出来る限りガスの利用を避けて安全に配慮する。また、照明器具は高効率器具を多用し、省エネルギーをはかるとともに環境負荷の小さい光に努める。空調、給水、給湯設備には部門ごとに参考メーターを設置してコスト管理を行う。

設備計画の概要は下記の通り。

1) 空調方式

メイン冷暖房設備：セントラル式空調 + ファンコイルユニット

熱源：灯油炊き吸収式冷温水発生器

サブ暖房設備：全室床暖房

熱源：深夜電力

サブ暖房設備は床面温度のみに配慮し、室温管理はメイン冷暖房で実施。冷暖房設備は自動制御機能完備。各室に環境基準に適合する換気扇、送配風紀を設置し、部分的に前熱交換換気扇を用いてシックハウス対策のための終日換気。換気用吸排気ダクトには断熱処理により結露防止。

2) 給排水衛生

給水：屋外受水槽より

給湯：灯油炊きセントラル方式（浴室系統）、電気温水式局所給湯（浴室以外）

排水：公共下水道に接続、汚水・雑排水は合流式

消雪設備：地下水散水式、自動関知方式

構内に井戸（2カ所）を掘削し、冬期間の降雪時には散水で駐車場及び通路の消雪を行い、動線を確認する。

衛生器具設備：節水器具、防汚処理器具

節水及び清掃管理において省エネルギーをはかる。

3) 電気

受電：3相3線6.6KV

4) 防災

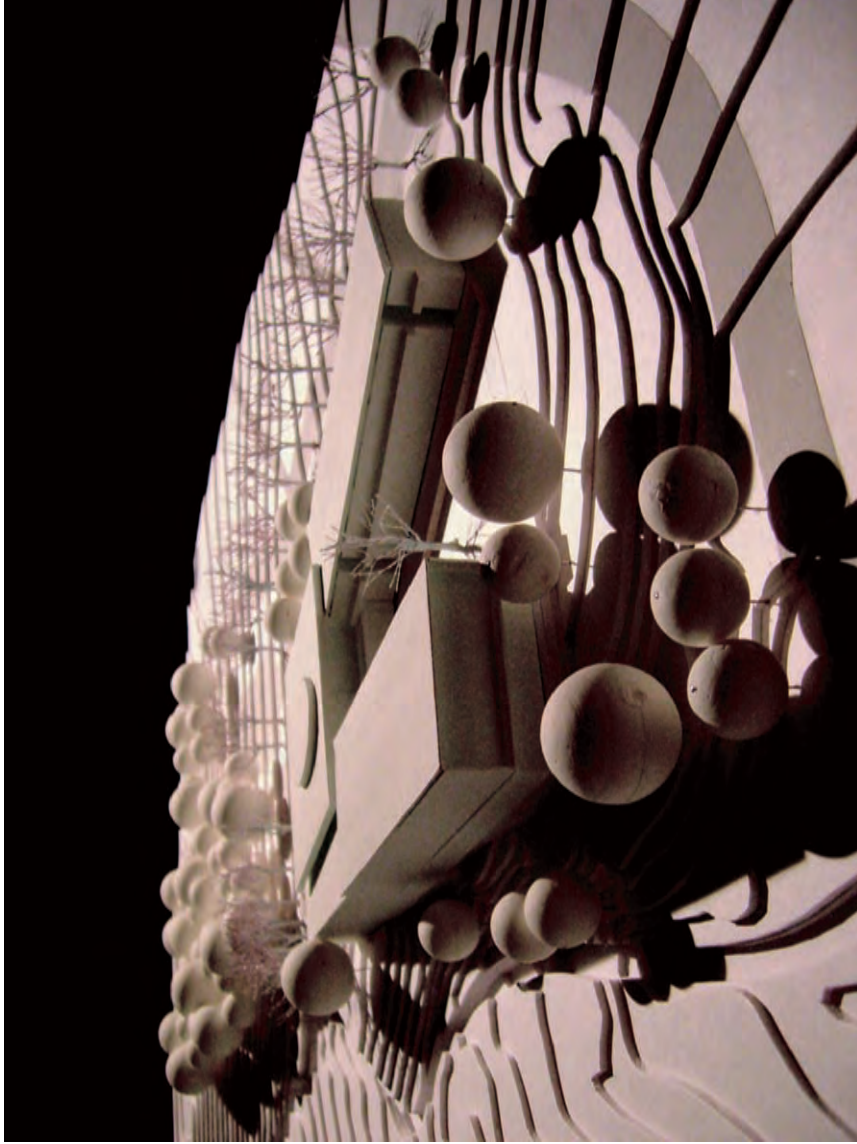
消火：スプリンクラー設備、非常電源

警報：火災報知設備、非常警報設備、非常通報設備

排煙：自然排煙

避難：非常照明、誘導灯

その他：放送設備、電話設備、時計設備、LAN設備、ナースコール設備、雪庇防止設備、消雪設備（外構）、外灯設備

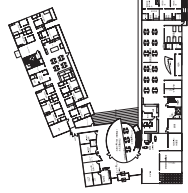


介護から生きがいへ。

今後の福祉施設は求められる人材は、従来の単なる「人と交わらねばならない空間（サービスマン）」の設計から「人と交わりながら生きる空間（サービス＆デザイン）」の設計へ。生きがいのある空間へ。設計・デザインしている。

「花」やがに、「華」やがに。

施設の特徴は「花」と「華」。花は自然の恵み、華は人の営み。施設は「花」と「華」を融合し、生きがいのある空間を創出する。

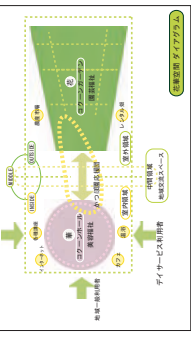


斬新でありながら暖かい空間デザイン

施設デザインを学ぶとき、従来の施設では、いわゆる「暖かい空間」を創出することが目的となっていた。しかし、この施設では、斬新でありながら暖かい空間を創出することが目的となっていた。斬新でありながら暖かい空間を創出することが目的となっていた。斬新でありながら暖かい空間を創出することが目的となっていた。

テーマを生かす空間構成

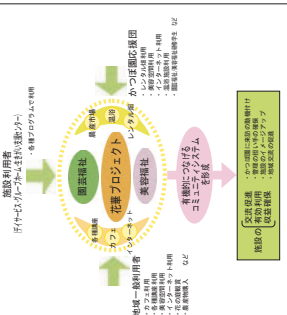
空間構成はテーマを生かす。テーマを生かす空間構成。空間構成はテーマを生かす。テーマを生かす空間構成。空間構成はテーマを生かす。テーマを生かす空間構成。



先進のソフトプログラム

施設利用者は、花をテーマとした施設にふさわしく、可能な限り趣向して暮らすことを目指す。先進のソフトプログラム。施設利用者は、花をテーマとした施設にふさわしく、可能な限り趣向して暮らすことを目指す。

Hanabana Project



新拠点施設プロジェクト / 民間法人 × 長岡造形大学 × コワーキングプロジェクトチーム
Flower and Beauty
【建築設計】 ← 【花+華プロジェクト】 → 【設計事務所】

受託事業名：

橋本市中心市街地伝統的町並み調査業務（東家地区）

発注者：橋本市

受託期間：平成17（2005）年5月1日～平成18（2006）年3月31日

プロジェクト主査：平山育男

プロジェクトメンバー：藤川昌樹（筑波大学）

御船達雄（財団法人和歌山県文化財センター）

プロジェクトのメンバー

本調査では建築調査を平山と御船が担当し、史料面は藤川が担当した。建築調査では本学1期生の田村収が建築写真の撮影、本学3期生の梅嶋修、本学デザイン研究開発センター研究員の西澤哉子等が実測調査を担当し、併せて長岡造形大学の大学院及び学部学生が参加した。

本年度の活動内容

本年度は以下の住宅等で建築的調査を実施した。日程は平成17（2005）年6月18日に堀江家住宅、19日に坂井家住宅（土井佐酒店）、8月6～7日に山本・山田・井本家住宅、12月3日に加藤家住宅、畑中家住宅、12月4日に土生家住宅、翌年3月4日に佐藤家住宅、5日に旧消防団倉庫の調査などを実施した。

調査では調査台帳の作成、写真撮影、実測図作成、聞き取り等を実施した。なお、学会等において以下の報告を実施した。

・日本建築学会近畿支部

- 1) 西澤哉子、平山育男、御船達雄、梅嶋修：分割された西野家住宅について - 橋本の長家建築7 - 和歌山県橋本市中心市街地の町と町家の調査研究 その36
- 2) 梅嶋修、平山育男、御船達雄、西澤哉子：稲竹醤油工場 - 橋本の工場建築 和歌山県橋本市中心市街地の町と町家の調査研究 その37
- 3) 御船達雄、平山育男：東家の堀田家住宅について 和歌山県橋本市中心市街地の町と町家の調査研究 その38
- 4) 平山育男、御船達雄、西澤哉子、梅嶋修：古池家住宅 - 佐藤家貸家と滝脇家住宅（長家）について 和歌山県橋本市中心市街地の町と町家の調査研究 その39

・日本建築学会（大会）

- 5) 梅嶋修、平山育男、御船達雄、西澤哉子：普請・建築文書にみる建築工事期間と職人達の関わり 和歌山県橋本市中心市街地の町と町家の調査研究 その40
- 6) 西澤哉子、平山育男、御船達雄、梅嶋修：嘉永7（1854）年の町家 土居家住宅について 和歌



堀江家住宅主屋全景 北西より



堀江家住宅主屋全景 南より



堀江家住宅主屋土間 西より

山県橋本市中心市街地の町と町家の調査研究 その41

7) 平山育男、御船達雄、西澤哉子、梅嶋修：安永6(1777)年建築旧堀田家 - 旧大谷家 - 岩橋家住宅について 和歌山県橋本市中心市街地の町と町家の調査研究 その42

本年度の調査で判明したこと

建築調査で判明した点を中心にその概略を記す。

・堀江家住宅

堀江高敏家住宅は大和街道を東家交差点から100m程ばかり西側に進んだ位置に建つ。街道には北面し、間口4間半、奥行11間半程の敷地に北側から主屋、離座敷、土蔵が建ち、敷地東側に半間巾の通路があり、土蔵前の塀際に風呂、便所が置かれる。当家は先代が薬屋を営んでいたが、現在は住宅として使われる。

大和街道に面して建つ主屋は入母屋造平入棧瓦葺の形式で、1階下屋は真壁造で軒は疎垂木、2階は大壁漆喰仕上げで軒裏を波形に塗込める。

堀江家住宅主屋は19世紀初期頃の建築で、前土間に面する2室店舗に復原される点が注目される。座敷も19世紀前半期の建築と古く、土蔵と併せて屋敷構が良く残る点、貴重である。

・坂井家住宅(土井佐酒店)

坂井家は大和街道と高野街道が交差する東家交差点を大和街道に沿って100m程西へ進んだ場所に位置する。敷地は街道に南面して、間口8間、奥行18間程と広大なもので、背面6間程が崖を挟んで2m程高くなっている。街道に面して主屋を建て、背面に作業場、土蔵、ム口、ハナレを設ける。土井佐酒店の名称は先々代の「土井佐一」に因んだもので、もともと兵庫県龍野出身であった同人は、東家交差点北東隅付近にあって醤油醸造所へ杜氏として来て、交差点南東付近に住んでいたという。それが大正時代に独立して同家を買取って独立し、醤油の醸造を始めたという。醸造は「亀甲に山サ」の商標で先代が終戦後まで行っており、同時に大正8(1919)年、橋本では最も古い酒店を営なみ、現在に至るといふ。

坂井家(土井佐酒店)住宅主屋は四本溝の鴨居を持



坂井家住宅主屋全景 南西より



坂井家住宅主屋座敷 西より



山本 - 山田 - 井本家住宅全景 北東より



山本家住宅2階 南東より

つ等、やや古式な形式である。18世紀後半に溯る建築のようで四間取の平面に復されるが、座敷は上手表側に位置するなど、橋本とはやや異なる構成を持つ主屋である。土蔵は桁行5間とやや大きく、19世紀前半の建築、ム口は大正時代、離れは昭和時代初期と、様々な時代の建築により形成されている点が、この住宅の見どころでもある。

・山本 - 山田 - 井本家住宅

山本 - 山田 - 井本家住宅は川原町の中程に位置する三戸一棟の長屋である。敷地は東西8間、南北5間半程で、建物はほぼ敷地一杯に建つ。平成17(2005)年8月に実施した調査時点では周囲住宅の大半が撤去を受け、空地のまん中に1棟が取り残された状態であったが、それ以前は敷地の北と西側に半間幅程度の公道があり、角地に建つ2階建てかつ軒高の高いこの建物は当該地域においてはやや目立つものであった。間取りによれば調査時点において3戸は個別の所有で、いずれも昭和20(1945)年直後からの入居で、山本、山田家は住居専用、井本家はかつて美容室を営み併用住居としたが、後に当該住宅を建設会社へ併用住宅として貸し付けていた。

今回の調査で建築年代示す1次資料は見い出されなかったが、間取りによればこの住宅は平野家次男の貸家として昭和時代初期に建てられたという。板材では2階床板からは丸鋸、2階天井からは帯鋸の引跡が確認され、上限としては大正時代中期と想定された。一方、山田家2階床板の目貼りからは昭和15(1940)年6月の新聞紙が発見された。但し他の住宅において同様の目貼りは確認されず中古のものと判断されたものの、絶対年代としてはこれが建築の下限を示すものと言えよう。以上、建築の構成も含め総合的に判断すると、昭和時代初期の建築とする間取りの年代が建築年代としては妥当のものと判断されよう。

山本 - 山田 - 井本家住宅は1階の片土間、2階の釣床等をはじめ、正面の袖壁、虫籠窓と片引窓の構成等に昭和時代初期における建築の特色を良く留めるものとして位置付けることができる。一方、古材を多く用い、質素な内装は長屋建築として建築の在り方を併せて良く示していると言えよう。



土生家住宅主屋全景 南東より



土生家住宅主屋全景 北西より



土生家住宅離れ座敷 北より



土生家住宅主屋小屋裏 東より

なお、本建築は平成17(2005)年8月に解体された。

・土生家住宅

土生家住宅は東家四つ角から旧大和街道を和歌山方面へ200m程西進した地に南面する住宅で、敷地は間口が8間半、奥行14間程で、背面に行くに従い敷地が迫り上がり、主屋の西側下手に蔵、下手裏に離れ、東側の中庭を挟んで物置を配し、一段高い敷地に息子夫婦の住宅が建てられる。東家では古くから良質の土が産出されたため瓦の製造が盛んで最盛期にその数は7、8軒に及んだという。土生家はその中の1軒で現在は19代目、「瓦与」の屋号を有したという。背面の息子夫婦住宅の場所に工場があり平成12(2000)年まで瓦屋を営んだとする。

土生家住宅主屋は18世紀中期に溯ると考えられる建物で、中土間形式の四ツ間取に復原される。土蔵は18世紀中期以後の建築で、棟持柱の形式を有し、主屋の一部を取壊して建築した経緯が明らかになる点等が貴重である。離れは明治時代末頃の建築と推定される。物置は改造が少なく、昭和40(1965)年頃の建築という。瓦製造を行った住宅の全体像が良く残る点、見所と言えよう。

・畑中家住宅

畑中家住宅は東家四つ角から旧大和街道を和歌山方面へ3軒目、街道に南面する住宅である。敷地の間口は6間、奥行9間程度で、主屋背面の一段高い敷地に土蔵が建つ。畑中家は現在蒲団店を営むが5代前からこの地に住むとされ、かつては骨董屋を営んでいたともいう。なお、位牌は18世紀後期の明和5(1868)年のものからが残る。

畑中家住宅主屋は18世紀後期に溯る可能性のある町家として、土蔵も残し貴重と言える。

・加藤家住宅

加藤千佳夫家住宅は橋本の上本町通り中程に位置し、街道には南面して住宅が建つ。間口は9間程あり、街道に面しては東から倉庫、主屋が建ち、これらの背面に蔵、離れ等が配される。加藤家は「加藤徳商店」の名称で3代前から酒屋を営み、主屋は兼用住宅とさ



土生家住宅土蔵主屋全景 南西より



土生家住宅土蔵2階 南より



畑中家住宅主屋全景 南西より



畑中家住宅主屋座敷 西より

れる。調査対象は洋風の外観を持つ倉庫と蔵である。

この地には古くは明治25（1892）年、橋本小学校が建設され、明治37（1904）年まで存続した。そして大正13（1924）年8月には紀伊無尽（株）本店が設けられ翌年1月に開業、同社は昭和18（1943）年2月、旧幸福無尽（株）と合併し、同橋本支店となり、同社が戦後の昭和26（1951）年に相互銀行法施行により幸福相互銀行となり、昭和32（1957）年1月に、橋本駅前の新築店舗に移るまでこの地において銀行業務を行った。なお、紀伊無尽の創設は橋本市清水の楠本恒太郎によるものであるが、恒太郎は明治43（1910）年以来、学文路村の村議、大正11（1922）年から翌年にかけては第15代の村長も務めたが、経歴から見ると村議、村長を務めて以後、無尽の経営に臨んだことが分かる。

倉庫は前面が2間程後退し、東側の敷地境界には煉瓦造でイギリス積の擁壁が設けられ、先端に洗出で造られた球のモニュメントが配される。倉庫の平面は現在1階が貸倉庫、2階が住宅として賃貸され、1階の一部を調査した。正面から見ると4間半の間口を持つ1階は1間半に3分割され、東側1間半の引違戸から倉庫部分に入ることができる。形となる倉庫は背面側で床が一段高くなっている。倉庫として5室の個室に分割され、床、貸倉庫内壁部分は現状でビニールクロス張として、天井は縁甲板張、背面から1間半程度のところに部屋境とは無関係に3本の柱が建つ。倉庫背面には蔵に続く廊下と半間規模の下屋があり、西側に水廻りを備えた一室が接続する。下屋、廊下は棧瓦葺で、水廻りはモルタル壁の陸屋根とする。

蔵は倉庫背面東側に2間半ほど離れて位置する。煉瓦造平家建、切妻造妻入棧瓦葺の形式で、南側正面内側に漆喰塗込の引戸、外側に鉄製の開戸を設ける。規模は壁厚が360mm、長手内法2,820mm、短手2,120mm、天井高2,550mmと小規模なものである。基礎は御影石切石で、壁面の煉瓦はフランス積28段を積み、29段目を45度振って斜めに積み、30～32段目は迫り出しとして瓦葺とする。入口前には自然石の沓脱ぎ石を配し、内部は地盤面より410mm上げて拭板敷とし、壁面はモルタル仕上げ、煉瓦でポルト天井を構成し、内部北西隅に小竹金庫製作所製の金庫を配する。

加藤家倉庫は紀伊無尽本店開設以来の建物で、大正



加藤家住宅倉庫全景 南西より



加藤家住宅蔵全景 南西より



佐藤家住宅主屋全景 北西より



佐藤家住宅主屋座敷全景 南より

13 (1924) 年末頃の建築と考えることができた。金庫室の役割を持つ煉瓦造フランス積の蔵も同時期で、内部をポルト天井に組む等、小規模ながら本格的な形式を持つ。建築年代も明らかな近代建築として貴重。

・佐藤家住宅

佐藤家住宅は東家四つ角から旧大和街道を和歌山方面へ200m程西進した地に北面する住宅で、現在は9代目という。住宅の敷地は間口が約10間、奥行13間程でこれに庭が加わる。背面に行くに従い敷地が下がり、かつては庭を介して紀ノ川まで望めたという。主屋の西側下手に門を挟んで乾蔵が建ち、背面には上手より蔵、南座敷、奥の座敷が置かれる。

主屋は19世紀前期頃の建築と考えられ、幕末期ころ下手側に土地を買い足した。主屋に半間の増築があり、門と乾蔵の建築があったものと考えられる。奥座敷は明治時代中期頃までの建築、南座敷は大正時代頃の建築と考えられる。

佐藤家は広大な敷地の地形を生かしながら、主屋と座敷、蔵、門を配する東家でも代表的な住宅である。

・旧消防団倉庫

旧消防団倉庫は東家の四つ角から旧大和街道を西進した2軒目、街道に北面して建つ。もともとは消防団のポンプ車倉庫として用いられたもので、20年程前に倉庫が紀ノ川沿に別置されてからは納税組合事務室として用いられたという。

この建物については1950年代撮影とされる写真が残る。写真は建物を北東から撮影したもので、建物北面と東面が示される。建物規模は現状とほぼ同じで、北立面は引違戸で西側に袖壁を構え、庇部分に外灯が設置され上部に紋章を掲げ、屋根立ち上げ周囲に蛇腹を回す。東側面は北側に引違窓で、南側に出入口を設け、他に小窓2つを設ける。全体として現状と比較的よく類似するものの、窓や袖壁、蛇腹の細部に相違点が少々見受けられる。聞き取りによっても現状の建物は20年程前に建替たものというものもあった。これらの点を総合するとこの建物は紋章、外灯などを再利用しつつ、写真にある建物を20年程前に建替えたとするのが妥当であろう。



佐藤家住宅乾蔵2階 北より



佐藤家住宅奥座敷 西より



佐藤家住宅南座敷 西より



旧消防団倉庫 北より

受託事業名：

CRS - SOLOに関するブランドマーク・ロゴタイプ・品番の表示デザイン

発注者：永田精機株式会社

受託期間：平成17年7月7日～平成17年9月14日

プロジェクト主査：松丸 武

プロジェクトメンバー：松丸 武

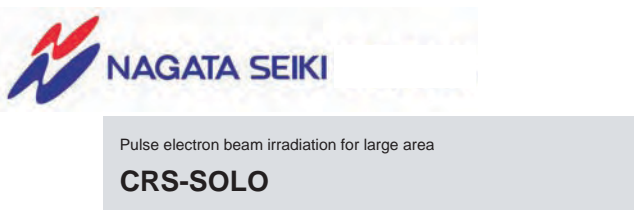
デザインの概要

大面積であることが特徴の電子ビーム装置（2310W × 2000H × 1050D）、その前面上部に表示するブランドマーク、ロゴタイプ、品番の表示を新規にデザインした。永田精機株式会社は、靴下編み機の総合メーカーとして培ってきたメカトロニクスを生かすとともに、今日では薄膜技術等の先進技術を開発、製品化する

メーカーで、今後が期待されている。表示には、技術の先進性、精度感、信頼感等を表現、以下のような案を提案し、下の*案が実施された。

同時に、これらの製品や表示に関するデザインマニュアルがないとのことで、今後はC Iの考え方等を導入し、デザイン統合計っていくようすすめた。

* 採用案



受託事業名：

津南中等教育学校校章デザイン・マニュアル作成業務

発注者：新潟県立津南中等教育学校

受託期間：平成17年11月1日～平成17年12月20日

プロジェクト主査：福田 毅

委託内容

文部科学省の指定を受け、新潟県立津南高等学校と津南町立津南中学校を統合し、1つの学校で6年間の中高一貫教育を行う「新潟県立津南中等教育学校」が、平成18年4月に開設された。

本業務では、当校の開設に合わせ、学校の顔である校章を新たにデザインし、それに伴う付属品のデザイン・マニュアルを作成した。

コンセプト/イメージ

津南中等教育学校は、現在の津南高等学校の校舎を使用することになっている。現地見学を通じて、校舎の雰囲気把握し、デザインに反映することとなった。



津南高等学校の校舎及び校章



経緯

09月06日 第1回打合せ（依頼内容確認）

09月28日 第2回打合せ（詳細内容確認）

10月20日 現地見学（校舎・町内見学、詳細打合せ）
デザイン案作成

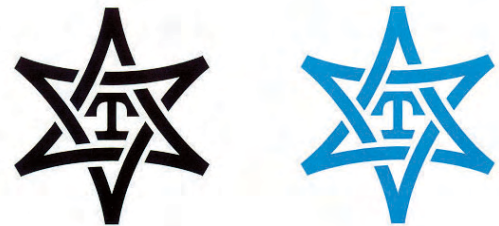
11月10日 第3回打合せ（デザイン案提示）

提示したデザイン案から最終デザインを決定
成果品の提出

デザイン案

コンセプト・イメージを念頭に6案のデザインを制作した。そのうち、最終的にF案のデザインが採用されることとなった。

【A案】



また、デザイン制作にあたり、以下に示す当校及び津南町のイメージに沿ったものをデザインすることとなった。

- ・県立津南中等教育学校：「夢の実現」（教育方針）
- ・津南町：豊かな自然（河岸段丘、山河、雪など）
歴史・文化（土器、農業など）



津南町の豊かな自然（現地調査より）

★ 新潟県立津南中等教育学校

★ 新潟県立津南中等教育学校

★ 新潟県立津南中等教育学校

★ 新潟県立津南中等教育学校

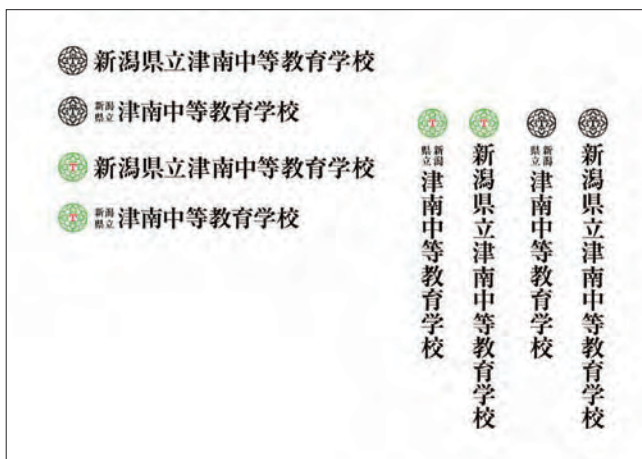
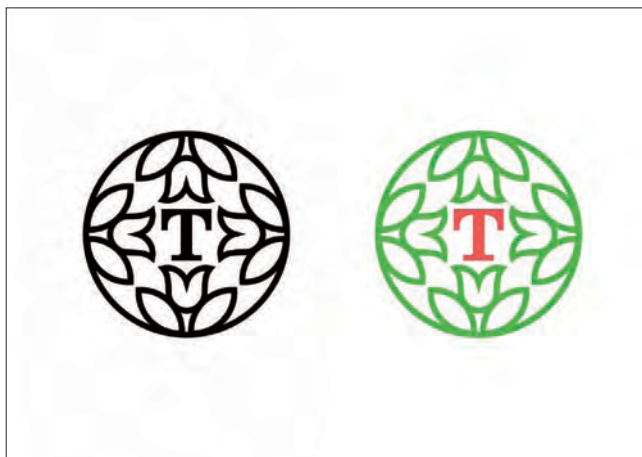
★ 新潟県立津南中等教育学校

★ 新潟県立津南中等教育学校

★ 新潟県立津南中等教育学校

★ 新潟県立津南中等教育学校

【F案】 採用デザイン



さしさを表現している。また、緑の配色は津南町の豊かな自然を表し、自然のやさしさ、ぬくもりを一層強く表現している。

津南中等教育学校の生徒を取り巻くすべての人々と自然の「あたたかさ」、「やさしさ」及び「ぬくもり」に支えられて、逞しく成長し、各々の「夢」を実現してほしいとの願いを込めている。

デザインの意味

中央に配置された「T」は「津南中等教育学校」を表し、その周りを取り囲む花は「やさしさ」を表している。

周囲の花は、家族、友人、教師及び地域の方々のや

2. 応用教育研究関連プロジェクト報告

受託事業名：

自動露光装置デザイン委託

発注者：(株)アドテックエンジニアリング

受託期間：平成17年6月1日～平成17年11月6日

プロジェクト主査：土田知也

メンバー：大島裕樹（調査、ラフモック制作）

金田 愛（モデル制作）

中野恵里子（モデル制作、GUIレイアウトデザイン制作）

河口唯史（GUIレイアウトデザイン制作）

(1) はじめに

露光装置とはプリント基板を作るための産業機械である。

プリント基板はコンピュータ、デジタルカメラ、カーナビゲーション、携帯電話など様々な情報機器の配線に使用され現在の工業を支える必須の技術である。

具体的には大きなフィルムに、配線パターンを自動的に露光焼付けする機械であり、光・レーザー技術、情報処理技術、計測技術、メカトロニクスなど先端技術の融合体でもある。投影式露光、コンタクト式露光、両面同時露光など様々な種類がある。

今回、依頼があったのは同社の露光装置の最高価格機種で、その外形デザインと画面（GUI）のデザインである。GUIは基本的な画面だけで50以上、さらに下位メニューのデザインも含んだ。

(2) デザインに取り組むスタンス

産業機械のような製品は、カッコの良いものを作れば売れるものではない。意識したのは、クライアント（アドテック）の利益、この機械を購入したメーカーの利益、そして実際に操作するエンドユーザーの利益である。多くの耐久消費財の様に「買い手」＝「使い手」でないことが、この種の機械の特徴といえるかもしれない。

(3) 調査

実際に従来型機種を操作しているところを、観察させてもらうと同時に、複数の方へ聞き取りを行った。操作の様子はビデオで撮影し、後で繰り返し観察、確認をしている。

外形デザインについて

プリント基板のベースとなるフィルムシートを設置するために、前面中央に大きな扉がついているが、開閉のために大きな空間を必要とする。(工場における機器の設置間隔はコストに影響することであり、一般にあまり広くない)

機器内部の温度、湿度などを表示するメーター等が高さ30cmのあたりに設置されており、数値が読み取りにくい。

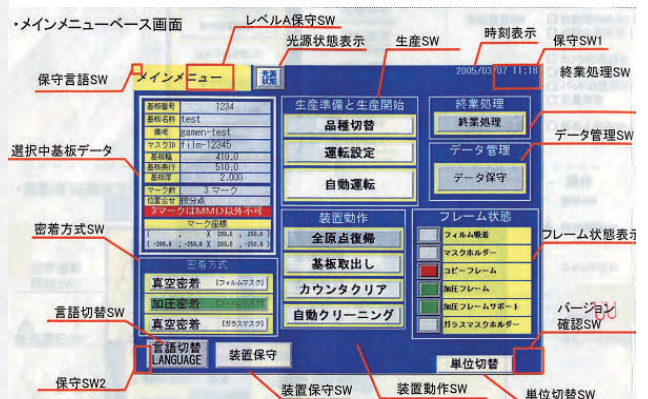
主扉をあけたまま、フィルムシートを確認しながら画面を操作することがある。モニターの角度など現行機種は、このような使い方には対応していない。

GUIについて

GUIは多くの要素に鮮やかな色が適用されているため、全体として落ち着きのない騒々しい印象を与える。

操作ボタンや、表示系の構造が読み取りにくく、慣れるまでに時間がかかる。

GUIのデザインに明快なルールが無いため（何となくはある）、新しい機種のデザインをするたびに、混乱が生じている。



従来機種及びその画面



モックによる検討風景

(4) 外形デザイン

1) デザインの方向性

従来の同社の製品は、実直で、銜いがなく、機能と構造に忠実に作られたもので、デザイン的に魅力的ではないものの、決して負の印象を与えるようなモノでもなかった。

求めるべきは、調査で明らかになった、操作性への問題点を解決するとともに、アドテックとしてのアイデンティティの確立、一目で同社の製品であることがわかるようなデザインとすることである。また本機で試みたデザインの特徴が、他の機種へも応用しやすいようなモチーフであることが好ましい。

さらに、規模的拡大より製品の優秀さで知名度を上げるという同社の経営方針に相容れるデザインであることが必要である。ただし、産業機械の場合、純粋な造形美にコストをかけても、売れ行きへの寄与は小さいと考えられることから、大きなコストアップとならないデザインとすることが求められた。

以上、一言で言えば、シンプルで精度感あるデザインが造形テーマとなった。

2) ラフスケッチによる展開

短期間で、集中的にラフスケッチを行ない様々な可能性を展開した。このスケッチを見ながらアド

テックのメンバーとミーティングをして、お互いのデザインに対する意識のすり合わせと今後の方向性を確認した。この時に、主扉の扱いと各種操作・表示系の配置が、大きなポイントであるという共通認識がえられた。

3) ラフモックによる検証

前回のスケッチで選択した、いくつかの主扉、操作系・表示系のアイデアを検証するため、原寸大のモックアップを製作し、効果の確認をした。このときに、主扉に関しては上部に少し巻き上げるガルウイングタイプとして、結果的に扉の開閉軌跡を後退させるアイデアと、画面を少し傾け、中央で作業している人間の視認性を改善するアイデアが高い評価を受けた。

4) デザイン案の提案

上記のプロセスを経て、以下の3案を提案した。

A案

- ・露光部と搬送部を明確に分けたデザイン。それぞれの役割を明確に表現する。
- ・主扉部の断面は完全な円弧とし、一枚扉を上引き上げるスライド式とする。
- ・タッチパネルは大きく斜めに傾けた面に取り付け、操作性を改善。
- ・主扉以外の扉はガルウイングタイプとする。

B案

- ・覗き窓を左右に通し帯として、シンプルでクリーンなアピアランスを得る。
- ・主扉はガルウイングタイプとする。
- ・タッチパネル、モニターは中心に傾け、作業をしながらの操作を容易にする。

C案

- ・覗き窓の下の面を斜めに傾け造形上のアクセント

とすると共に視認性を改善する。

- ・非常停止ボタンを斜め奥の面につけ、誤操作（後ろに下がって背中を押す）を防止する。
- ・温度、湿度などの表示を斜めの面に取り付け視認性を改善する。
- ・主扉の取手を扉の下につけて、閉める際の使い勝手を改善。
- ・タッチパネルを中心より、モニターをその右側に設置し、作業をしながらの操作を改善する。



検討の結果、C案をメインとするが突出したモニターは工場内での事故につながりかねないため、モ

ニター周りのデザインはB案とすることに決定した。



デザイン案検討風景

5) デザインの変更

製品化されるまでの変更点は以下の通りである。
 操作モニターを中心に向かって傾け視認性を改善するアイデアは、その後のモックによる確認で向かってモニター左側のフレームを凹ませないと、改善効果が薄いことがわかり取り止めた。
 2台の主機に挟まれた反転機の窓は実用上、効果が小さいことから取りやめる。
 ガルウイングドアは強度的な理由で採用を見送る。(このアイデアは、自動露光機より小型の後

述する両面路後期の扉には実現された。) 反転機(2つの同一形状部分に間に挟まれた部分)そのものは他の機種と共用するため、高さを揃えない。この機種の高さに揃えると反転機がほかの機種より背が高くなる。
 露光部の光源、ミラーの仕様が大幅に変更になり、上部のミラーボックスが大きくなりプロポーションが大きく変化した。

6) 最後に



最終形状

この機器は6月に東京ビッグサイトで行われる展示会（プリント配線総合技術展）に出品された後、市販されることが決定している。

また、ここでデザインされた横に黒帯を通すモチーフは他の機種にも採用・応用されており、アドテックのアイデンティティに寄与し始めていると考える。

(5) GUIのデザイン

1) デザインの方向性

調査結果を元に、次のような方針を定めた。

GUIの基本レイアウトをメニュー（画面）名、時刻、品種番号などの基本情報の表示、表示系および表示系と操作系を兼ねているもの、操作系の表示の3つのエリアに区分する。

ベースとなる色は地味な色を使用して、画面全体に秩序を与えること。

画面の基本色を大別された操作状態（自動運転中、装置調整・保守など）で分け、一目でわかるようにする。今まででも、同様の考えで色分けがなされていたが、よりわかりやすく徹底する。

その他、個々の要素（ボタンなどの表示系）の色と意味（通常状態、実行中、注意喚起など）の適

応の徹底、個々の要素デザイン（プッシュボタン、ランプなど）の統一を行う。

さらに、今回のデザインが今後のアドテックGUIの基本となることから、デザインのルール作りも求められた。また、GUIのプログラム・デザインには市販のソフトを使用するため、そのソフトで表現できる範囲から逸脱したデザインは排除した。

2) 基本デザイン案

メインメニュー画面にて3案の基本デザイン案を提案した。

A案：向かって左側に操作・表示系を右側に操作系をレイアウトした。

B案：上に操作・表示系を下に操作系をレイアウトした。

C案：向かって右側に操作・表示系を左側に操作系をレイアウトした

このうちのB案を選択し、そのデザインに基づいて、他の画面のデザインも行った。

3) 画面デザインのルール



左からA案、B案、C案

画面基本レイアウト

全体を水平に3分割して、上段はメニュー名と、時刻、品種番号などを配置。中段は表示系（操作系と表示系を兼ねているものも含む）を配置。下段は操作系を配置する。

画面基本色

中段は 30%のグレイ、 15%のグレイを使う。上段と下段は以下の通り。

- 起動画面：白
- 運転前段取り画面：ダークグレイ
異常でも正常でもない 意味を持たない色として、ダークグレイとする
- 自動運転画面：ブルーグレイ
順調に動作していることを象徴する青とする。但し、鮮やかな青は画面の中の個々の要素の認識を阻害するため、青と認知できる範囲で彩度

を落とした色とする。

- ・パラメータ設定画面：赤
ユーザーに注意を喚起するため赤とする。
- ・装置調整（保守）画面：緑
主に操作するのがメーカーサイドの人間であるため、アドテックのコーポレートカラーの緑にする。

個々の要素の色

20%グレイ：通常状態

緑：順調、実行中、開始など

オレンジ：注意喚起

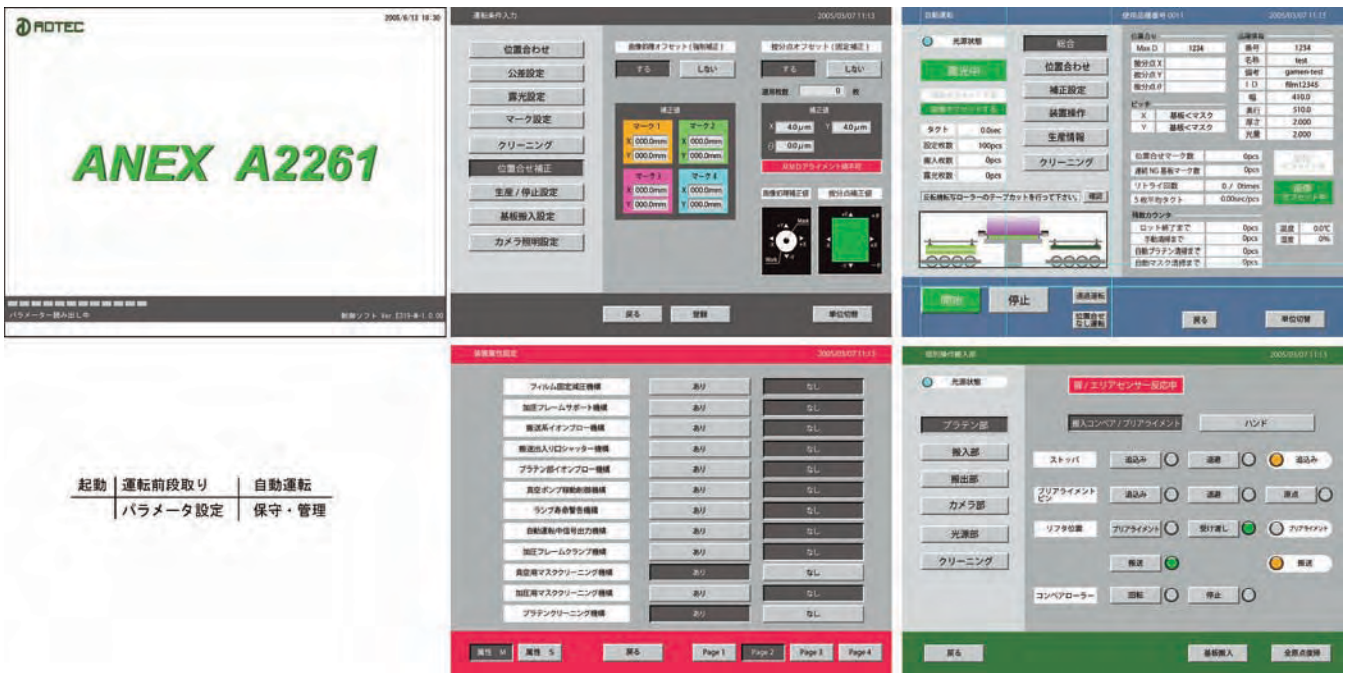
赤：異常、極めてまねな操作、危険など

その他

- ・選択、非選択を表示する必要があるときは、ネガポジ反転とする。
- ・ボタンは四角、ランプは丸、メッセージは白枠で囲んで表示。
- ・入力、表示ウィンドウは表示のみの場合は白ベタに文字黒、入力ウィンドウは凹み枠でグレイ10%に文字黒、入力、非入力が切り替わるときは凹み枠でグレイ10%に文字グレイ60%とする。

4) デザイン案

上記のルールに従い全ての画面のデザインを行った。抜粋して掲載する。



受託事業名：

国営越後丘陵公園サマーナイトプレゼンツ2005

発注者：財団法人公園緑地管理財団

受託期間：平成17年7月13日～平成17年8月21日

プロジェクト主査：新海俊一

プロジェクトメンバー：新海俊一（環境デザイン学科・助教授）

小林雄太郎、佐藤 宏、志田太一、嶋田紗樹子、田辺昭子、西澤卓也、山之内みゆき（同・当時2年生）

業務内容

平成17年8月11日～20日に国営越後丘陵公園で開催された「サマーナイトプレゼンツ」の会場設営ならびにライトアップ、光を使った遊技空間の計画および制作を受託した。

概要

学生を主体とするデザイン提案、制作、設営でサマーナイトプレゼンツ2005の会場計画に参画。具体的な制作・展示内容は下記の通り。

1) 地上に浮かぶ大イルミネーション(フェニックス)



2) ウェルカムゲートのイルミネーション



3) イングリッシュガーデンのイルミネーション



4) テーマボードの制作



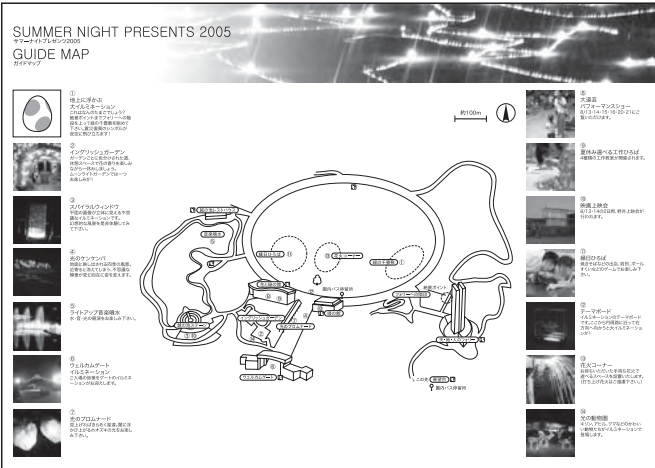
7) 光のプロムナード (風船葛のイルミネーション)



5) 場内案内看板の制作



6) 会場ガイドマップの制作



受託事業名：

桐生本町たてものデザイン集に関する調査

発注者：本一・本二まちづくりの会（桐生市）

受託期間：平成17年7月1日～平成18年2月28日

プロジェクト主査：木村勉

プロジェクトメンバー：筑波匡介・田中温子・伊藤まなみ・大嶋奈美・皆川佳代・松田直子・酒井崇嗣・渡邊かおり・橋沼真子
田辺昭子・三井創史・嘉瀬晶子・須藤亜弥子

1. 調査の概要

調査に至る経過 桐生市の「平成17年度まちうち再生支援事業」の一環として、「本一・本二まちづくりの会」で桐生市本町一丁目、二丁目の町並みを形成する建物を対象とする建築細部意匠集（冊子）の制作が計画された。その調査及び制作の実務が、長岡造形大学に委託された。長岡造形大学では、環境デザイン学科木村研究室を中心にして、この活動に取り組むこととなった。

同地区の町並み調査は、1994年に『桐生本町の町並み - 伝統的建造物群保存対策調査報告書（桐生市教育委員会・東京大学工学部藤井研究室）』でまとめられており、同報告書の成果にもとづいて建築細部意匠集の制作は進められた。この冊子は「桐生新町まち並みデザイン集」と名付けられた。調査が進展するなかで、合わせて地元児童向けの町並み案内書も追加制作されることになり、桐生まち並みガイド子供版「歴史ある私のまちを訪ねよう」と題したリーフレットも作られた。

主な調査日程 調査から冊子編集までの期間は、平成17年7月から翌18年2月末日までと設定され、年度の残る期間が印刷製本に充てられた。作業は以下の日程で進められた。

第1回 予備調査1 平成17年7月24日

- ・参加者全員でまちを歩き、印象をつかむ

第2回 予備調査2 平成17年7月30、31日

- ・調査対象とする建物の決定
- ・作業の方針、日程、作業分担の検討

第3回 実測調査1 平成17年8月20～23日

- ・対象建物の実測と写真撮影
- ・児童向け冊子制作打合せ

第4回 実測調査2 平成17年9月23～25日

- ・対象建物の実測と写真撮影
- ・建物所有者からの聞き取り調査

第5回 補足調査1 平成17年12月10、11日

- ・追加分、不足分の実測、写真撮影
- ・建物所有者からの聞き取り調査

第6回 補足調査2

- ・鳥瞰図スケッチ、聞き取り調査
- ・写真撮影



桐生市本町 中央上方天満宮の森の南を一丁目とする



天満宮上空から見た一丁目、二丁目 中央が本町通り

（上記写真は群馬県世界遺産推進室提供）



本町通り一丁目、二丁目の現在の風景



実測作業風景



宿舎での夜の検討会

第7回 補足調査3 平成18年3月12、13日

- ・不足分の実測、写真撮影
- ・全体打合せ、記述内容などの確認

調査担当 このプロジェクトは、学生から有志を募って、予備調査や調査研究内容を検討のうえ、学生主体で役割分担を定め、以下のような組織構成をもっておこなった。

教授 木村勉（プロジェクト代表、執筆・監修、写真撮影）

工房職員 筑波匡介（調査指導、写真撮影、編集）

修士1年 田中温子（学生代表、土蔵実測、執筆・編集）

学部4年 嘉瀬晶子（土蔵実測）／須藤亜弥子（住宅実測）

学部3年 伊藤まなみ（学生副代表、町家調査）／大嶋奈美（町家調査、鳥瞰図）／皆川佳代（町家調査、子供版制作）／松田直子（町家調査）／酒井崇嗣（景観調査、建物調査補助）

学部2年 渡邊かおり（長屋、鉄扉・戸袋等の実測）／橋沼真子（工場、塀・下見板等の実測、景観調査補助）／田辺昭子（住宅、戸袋の実測）

学部1年 三井創史（石畳実測、その他実測補助）

専門家の協力 伊藤晋祐（桐生の歴史・史料に関する教示）／佐々木正純（町並み調査資料の提供・教示）／金出ミチル（建物の観察・実測などの調査指導）

以下、平成18年3月12日におこなわれた地元報告会における各担当者の報告を掲載する。（木村）

2. 調査の趣旨、デザイン集作成の意義、報告内容の紹介

桐生のみなさん、こんにちは。長岡造形大学環境デザイン学科工房職員の筑波匡介です。きょうは、私たちが「本一・本二まちづくりの会」のみなさんと一緒に取り組んできた「桐生新町まち並みデザイン集」について、活動経過と成果を報告させていただきます。

「デザイン集」と長岡造形大学の取り組み ちょうど一年前ですが、まちづくりの会から、建物の詳細図集を作りたいとの相談をいただきました。これは、国が選定した全国の重要伝統的建造物群保存地区のいくつか

で試みられているもので、まちなみを修理・修景する際の参考書とも位置付けられています。

私たちにとっては、とてもありがたい機会でした。私たちの大学はデザインの専門大学で、「デザイン」と聞くと新しいものばかり扱っていると思われるかもしれませんが、昔の人々のデザインを現代にどのように伝えるかを考えることも、デザインを学ぶ学生たちにとってたいへん重要なテーマです。そして、なによりも造形大学には、文化財保存コースがあり、そこで学生が専門分野として学んでいます。

このコースは、歴史的な建物を未来に伝えるための人材育成の場となっていて、「詳細図集」は私たちにとって、まさに実践的で実りのある学びの場となりました。私たちにこの「詳細図集」を桐生本町一丁目、二丁目にあてはめて進めてみることになり、企画書を考えてみました。まず、この冊子を「桐生まち並みデザイン集」と仮に名付けることにしました。「意匠集」とか「詳細図集」という名前が各地の町並みでは出版されていますが、ちょっと専門的で堅苦しく感じられるような気がして、もっと普通に使われている言葉「デザイン集」としたのです。

デザイン集制作の趣旨 その制作趣旨を以下のようにまとめてみました。

桐生の本町通り一帯は近世初頭に町割りが形成され、地方の拠点都市として繁栄してきました。とくに近世から近代にかけての桐生は、わが国有数の近代織物産業の場として隆盛を極め、その姿がこんにちに残されました。

表通りから路地に至るまでの市街のさまざまな風景、通りに面した商店の町家・洋館の事務所・店蔵、そして脇門から奥に続く主屋・ノコギリ屋根の織物工場・織工宿舍・土蔵・中庭とその一画に座する祠、隣地に面して積まれた煉瓦の防火壁などなど、すべてが人々の暮らしを今に伝える遺産であり、刻まれたまちの歴史でもあります。それらは桐生代々の人々によって継承され、現在のまちづくりに活かされています。

このまちを構成する建物たちのたたずまいは、遺産を継承する意味で大切なものです。人々の日々の営みの中でそれらを持続させ、継続させる努力が必要

になってきます。今あるものは修理しながら今後も長く存続させ、新たに建築するものはデザインを慎重に選ぶことが求められます。

建物の将来を考える基礎知識として、まちの顔となっている歴史ある建物のデザインを知ることが必要です。そして桐生のみんがそれを共有できるよう、デザイン集を作り、広く普及をはかることがひとつの手立てとして考えられます。

以上により、本町一丁目、二丁目を中心に、桐生のまちの建物や景観を観察し、屋敷の構成、さまざまな機能と用途、それぞれのかたちと造りの分類などをおこないました。

さらに、屋根、軒、壁、窓、扉、基礎といった細部を集めて記録し、分析・整理しました。そして、それらをデザイン集として出版するために、検討をすすめながら図面、写真、文章など資料化し、このほど冊子の試作までの作成をいたしました。

「デザイン集」の特徴 私のあとで、学生たちが役割分担に応じて報告をさせていただきますが、私からは、この冊子の特徴を説明させていただきます。

じつは、従来、各地で作られてきたものとは、大きくふたつ、異なる部分があります。ひとつは、選んだ建物を、まちにある一般的なさまざまな建物としたことです。とくに、主として「通りに面した一般的な建物」としたのは、これからあちこちのお宅で修理したり新築したりするとき、だれもが参考にできるだろうと考えたためです。もうひとつの特徴は、調査で取り上げさせていただいたお宅に伺い、直接、お話しをお聞きし、冊子に収録したことです。

家は今まで自分ひとりで立ち続けてきたものではありません。そこに住む人が守ってきました。というより、そこに住んだ人が、手を加えながら維持してきたと言った方がいいかもしれません。

人々がいかに愛着をもってその家で暮らしてきたのか、その結果として家はどのような佇まいをもったのか。そうしたことも、その建物のデザインをほかの建物の参考にしようとする人に考えてほしいと思ったからです。

冊子は、デザイン集ともうひとつ、主に子供向けの



初めて桐生を訪れ、森さんと大内さんから案内を受ける



二回目の調査で調査対象物件を検討する



二丁目にある「しんまちサロン」を拠点にして活動



通りで実測作業を開始する

小さなものも作りました。これらは、きょう、試作品をもってきました。これから学生たちがひとりひとり報告させていただいたあとで、みなさんにご覧いただきたいと思います。

本日の報告の内容と担当者 さて、ではこれから学生たちが報告する内容をご説明します。それぞれ一人ずつお話しさせていただくので、みんな個性が出て、あるいは、聞きづらいところがあるかもしれませんが、この報告も学習の一環とお考えいただき、ご協力くださいますようお願いいたします。

最初は、「現地調査」について、実測調査をおもな内容とし3年の大嶋奈美が報告します。

次は、「聞き取り調査」ですが、3年松田直子を予定していましたが、欠席となったため、彼女の原稿を皆川佳代が代読します。

次いで、「学校での作業」として、現地調査で得たデータのまとめを学校ではどのように悪戦苦闘したのか、3年の伊藤まなみが報告します。

子供向けの冊子は、おなじく3年の皆川佳代が説明いたします。

現地での調査合宿生活を、2年の渡辺かおり、橋沼真子がお話しします。

1年生も参加していきまして、三井創史と申します。彼は桐生出身で、「桐生で新たに知ったこと」という題で報告します。

以上のまとめとして、大学院1年の田中温子が冊子の説明をし、みなさんに試作をご覧いただくことになっています。

そのあと、これは無理な願いをききとどけていただきましたが、桐生工業高校出身で本学4年の須藤亜弥子から、彼女の卒業研究「環境空間再生 - 桐生中央商店街に立ち並ぶ昭和40年代建築についての歴史的調査・研究 - 」を紹介させていただきます。

では、よろしく願いいたします。(筑波)

3. 現地での作業

3年の大嶋奈美です。今回の調査が順調に進められたのは、まちの方たちの温かい応援のおかげだと思っています。ありがとうございました。

作業の経過 この桐生市本町一丁目、二丁目の調査

は、去年の夏からスタートしました。まず初めは7月末にフィールドワークで桐生を訪れました。この作業では、桐生のまちに興味のある学生約15人が参加し、「本一・本二まちづくりの会」の森さんと大内さんから説明を受けながらまちを歩いて回りました。

そして、その1週間後に、主要な役目を負うことになった6人で再び桐生を訪れ、調査対象物件を決める作業をおこないました。町家、蔵、ノコギリ屋根工場、門、環境物件といった項目をまとめていきました。調査を進めるにあたっては、打ち合わせも大事なことでした。森さん、大内さん、学生全員の意見を出し合い、話しをまとめていきました。

私たちはそれから夏休みを経て、8月末に3泊4日で本調査を行いました。同じ種類の建物ごとに、土蔵、町家、環境物件、その他などいくつかのチームをつくり、それぞれ担当する物件の調査を進めていきました。

私は通りに面した二階建の町家を2棟担当しました。脇に門のある、大きな屋敷でした。

夏の暑い時期だったため、道で長い時間ずっと建物を描いている作業はなかなかたいへんでした。しかし、道を通りかかるまちの方たちに「頑張れ！」など励ましの言葉をかけていただき、それが自分にとって作業を進める励みになり、「よし、やるぞ！」という気持ちになりました。

一ヶ月後の9月末には、2回目の本調査として、2泊3日の作業を行いました。2回目の調査からは、町家チームは聞き取り調査も始めました。

宿泊先は、町内会のご好意で二丁目の集会所を充てていただきました。集会所は広い畳の部屋で、ここにテーブルを広げ、毎晩その日の調査のまとめを行いました。大内さんにも集会所まで足を運んでいただき、経過報告を聞いてもらいアドバイスを受けました。

大学にもどって、2回目の本調査の成果をもとに整理を進めていくと、測り漏れや、もっと充実させたい部分がたくさん見つかりました。季節は冬になり、12月半ばには2日間の補足調査に出かけました。夏から一変し、この日は厳寒の日でした。その頃大雪に見舞われていた長岡と比べると、雪の寒さとはまた違う、風の冷たさがあることを、身をもって感じました。

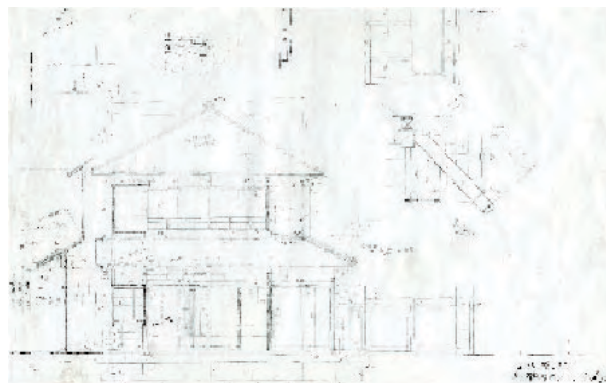
建物の実測 建物の図面を描くには、建物を前にして



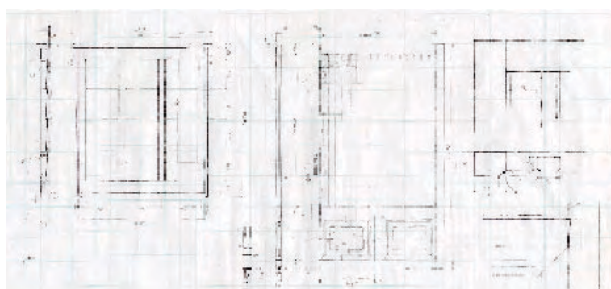
二丁目の集会所を宿舍として借りる



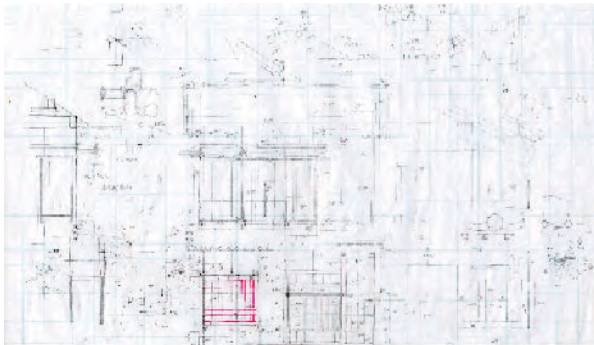
夏に始めた調査は冬に及んだ



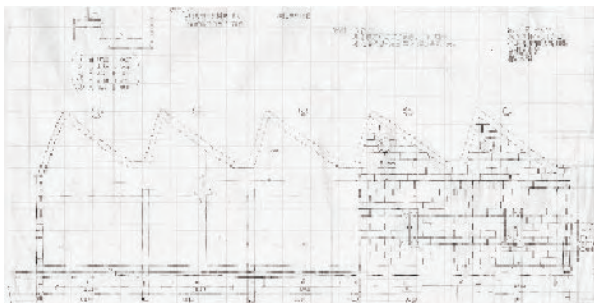
野帳の例（通りに面した町屋の正面）



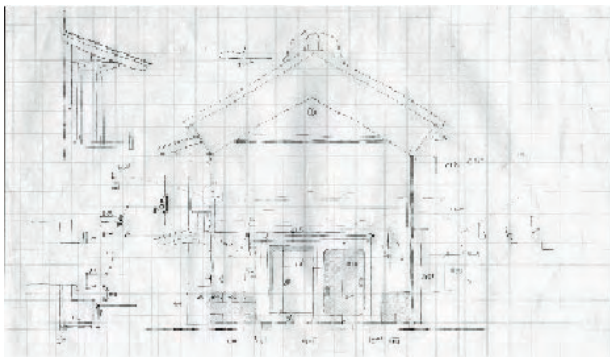
野帳の例（建具、戸袋などの詳細）



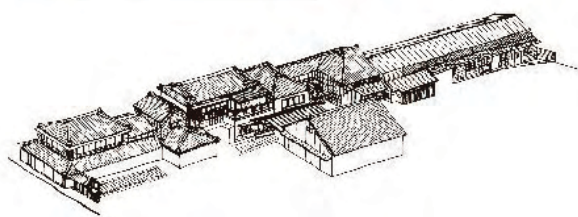
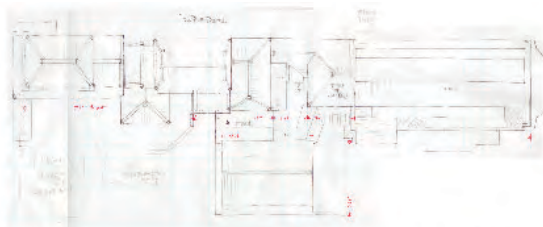
野帳の例（横丁の貸家住宅の正面）



野帳の例（ノコギリ屋根工場側面）



野帳の例（土蔵）



作成中の鳥瞰図

その姿かたちを、さまざまな情報を入れながら手でスケッチするように描きます。これを「野帳」と呼びます。たとえばこれは、建物を正面から観察して野帳をとったものです。建物を描き、それぞれの寸法を測って書き込んでいきます。細かいところや詳しく描かなければわからない部分は、空いている余白に、その部分を拡大して書き込んでいきます。

次は建具詳細の図面です。戸、戸袋、格子、手摺などの立面、断面を観察し、寸法も落とし込んでいきます。他にもそれぞれ担当している人たちの図面を紹介します。

矢野本店向かいの長屋。実測では屋根まで上がらせてもらいました。

通りから一步なかに入った二軒並んだ貸家。今は空き家になっています。

ノコギリ屋根工場。

土蔵。

そして矢野本店の町家と店蔵^{みせくら}です。

この実測調査で描き上げた図面は、調査に関わった全員を合わせると、何十枚にもおよびます。描き終えた数だけ、私たちの力になったと感じます。

鳥瞰図の作成 もうひとつ私が取り組んだ作業は、織物工場をもったひとつの屋敷の鳥瞰図の作成です。鳥瞰図とは屋敷全体を斜め上から眺めて描いた図面で、各建物の構成が分かるように描きます。この図の作成に取り組むにあたり、私が桐生に足を運ぶ回数は7回となりました。私はこれまでに鳥瞰図を描いたことがなく、たいへん不安でした。しかし、野帳と写真を見比べながら、手直しを繰り返して作業を進め、なんとか形にすることができました。（大嶋）

4. 聞き取り調査

（報告担当の松田が、本日は参加できなくなったため、皆川佳代が原稿を代読いたします。）

初めて経験した聞き取り調査 私は今回の調査で初めて聞き取り調査を経験しました。聞き取り調査に応じてくださった方はお分かりと思いますが、聞き取り調査は貴重な時間をさいて見ず知らずの私達からのいろいろな質問を受けるわけです。

私の家は両親共に働いており私や兄弟も学校がある

ため普段は家にいません。また土曜、日曜も忙しく、ほとんど家族が家にいることがありません。そういう個人的状況の立場からすると、貴重な休みや空き時間に質問に答えていただけたことは、とてもありがたいと感じました。

今回の聞き取りでは皆さん快く承知してくださり、また家に訪ねた私たちを座敷に上げていただき、ありがとうございました。聞き取り調査がどのようなものなのか分からない方もいると思いますので質問の例を挙げますと、『この建物は何年ごろ建てたものか』『増築や改築はしたことがあるのか』『構造は』『住んでいる方の家族構成は』『なぜこの家に住むようになったのか』『生活しているの短所・長所』『建物にまつわる思い』などです。

一見すると堅苦しくなりがちで、なおかつ一歩踏み込んだような話題の中でもざっくばらんにいろいろなお話をしていただき、私たちは調査をしているというよりも、よく知っている人の家に遊びに行ったような気分になってしまいました。

失礼なことを言ったのではないかと、また、聞き方が拙かったために本当はもっと聞かなければならなかったことが他にもあったのではないかと、内容は十分であったのだろうか、と反省もしましたが、慣れない聞き取り調査がこれほどスムーズにまた楽しく進めることが出来たのは皆さんのおかげです。

お宅にお邪魔する形での聞き取り調査の他にも、町の中で図面をとっているときも皆さんから親切にしてくださいました。皆さん気さくに声をかけてくれ、また調査している家の歴史など、ご自分の知っていることを教えていただき、とても勉強になりました。

調査から感じた桐生の人々のこと 桐生の皆さんは、自分の家だけでなく、町全体の歴史やご近所のことをよく知っているということが今回の聞き取り調査を終えてから気付いたことです。私の実家の家も歴史は古いのですが、まったくといってよいほど私は歴史を知りませんし、隣近所や町全体のこととなるともっと分かりません。本町一丁目、二丁目の方々は自分達の住んでいる場所のことを本当によく理解されていて、それはとても素敵なことだと思います。

もうすでに一昨年になりますが、中越の震災のとき



神保さん、中島さんと



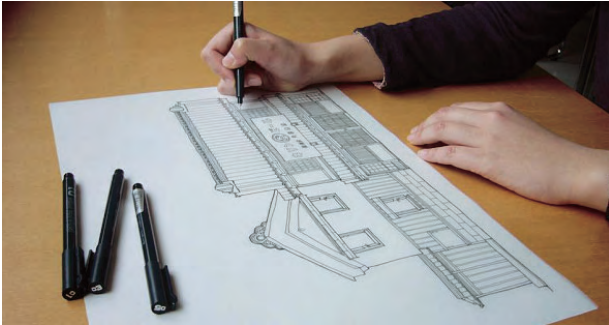
岡田さんご夫妻と



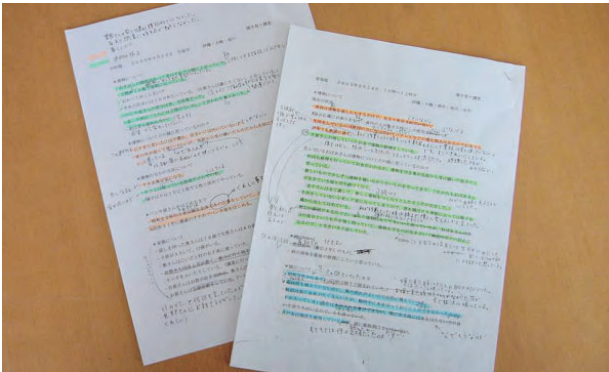
曾我さんと



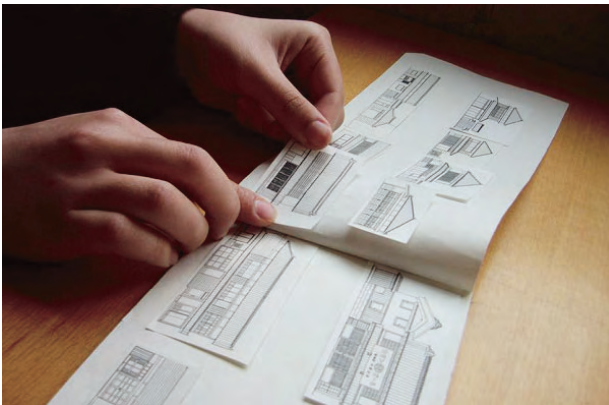
中村さんご夫妻と



図面はフリーハンドで仕上げた



何度も書き直した聞き取り調査の原稿



冊子の編集



回を重ねた検討会

に、地域づきあいがどれほど大切なものなのか改めて認識しました。最初にも言いましたが、うちはあまり家族が家にいないため近所づきあいも疎遠になっていました。それはどうもうちだけではなかったようなのですが、地震があった直後、家の外に出てみると普段近所づきあいの濃い家同士は「大丈夫か？」とお互い助け合ったりもするのですが、そうでない家は近所の人に話しかけても「あなたは誰？」的な視線を受け、まともに話をすることも出来ませんでした。あのような災害時は心細くなりがちで、誰かと話をしていたり、一緒にいるだけで気持ちが安心するものなのですが……。そういう経験と、今回の聞き取りの様子から、本町一、二丁目は人々の結びつきが強くとても魅力ある町だと感じました。ありがとうございました。（松田 / 代読・皆川）

5. 学内での作業

3年の伊藤まなみです。私は、現地で調査した成果を持ち帰った大学でどのように作業をすすめたかを中心に報告します。

デザイン集の制作 本町一丁目、二丁目で実測、聞き取り調査をしたものを学校でどのような冊子にするのか、みんなで話し合いながら作業を進めて行きました。どのようなサイズや形にするか、レイアウトはどうするか、図面の縮尺はどのぐらいにするのか。悩んだことを挙げればきりがありません。最初に考えたものと最終的なものとは、大分違うものになっています。手探りで始まった学内での作業は、慣れないことなので不安な要素がたくさんありましたが、形が見えてくるにしたがって愛着がわくものになっていきました。

図面の作成 冊子の中にある建物の立面図は、手描きになっています。図面を、パソコンで一度描いてから、定規を使わないフリーハンドで描いてあります。手描きで柔らかい線を描き、暖かみのあるものにしたからです。どのようなペンで描くのがいちばんいいのか、描き方はどうすればいいのか、試行錯誤が続きました。描いていくにしたがって、測り漏れのある箇所や写真を見るだけでは構造がわからない箇所が出てきて、作業が止まってしまうこともありました。ただ描くだけではなく、自分で理解しなければ描けないこ

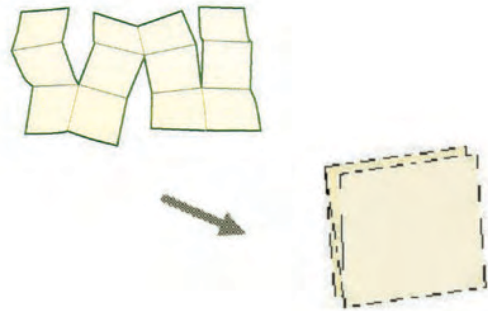
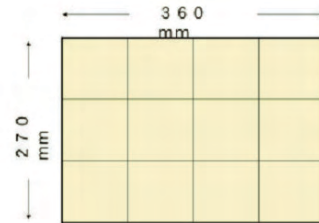
ともわかってきました。何回も先生に質問をしました。

パソコンで格子や戸袋などのディテールを描いてありますが、それらも含めると、一人あたりの描いた図面は、かなりの量になりました。一枚の図面が完成して先生とチェックする時もみんなの都合が合わず、全員で集まることが難しいことが多く、個別で何回も研究室に通い、描き直すことも多々ありました。

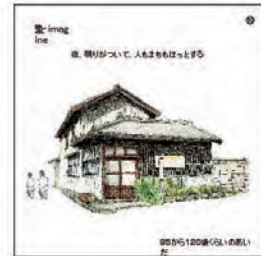
聞き取り調査のまとめ 聞き取り調査は全員が初めての体験でした。松田が先に報告したように、質問内容を決めたり、相手の方に失礼のないように話し方を考えたり、緊張しながら行いました。聞いてきたことを文章に表す作業は難しく、聞いてきたことをそのまま文章にするだけでは、第三者には何を話してもらったのか解釈できないこともあります。それは、聞き取る者自身が話をよく理解しなければいけないことでもあるのだと、やっけていて気付きました。箇条書きで短く句切って書く作業を繰り返し行いました。何回も自分で読み、内容がちゃんと伝わるか確認しながら、読んだ人に理解できるものを目指しました。みんなでチェックしたので、読みやすいものになっていると思います。

調査と作業全体を通して いま全体を通して振り返ると、図面や文章をまとめて一つにする作業がいちばんたいへんだったのではないのでしょうか。レイアウトや、ページを決めたり本の形に図面をはめ込んだりする作業は、何回も試作品を作って考えました。図面を縮小コピーして切って貼付ける作業を繰り返して、気に入った形に近づけて行く作業は、とても時間がかかりました。文章も、わかりやすく簡潔にまとめるため、みんなで読み直し、手直しが続きました。

まったく形の見えなかったものが、一つの図面が完成し、文章がまとまって、1ページごとできていくと、早く完成したのが見たい気分になり、たくさんの人たちに見てほしいと思うようになりました。作業はいくつかの修整を残していますが、まもなく完成します。(伊藤)



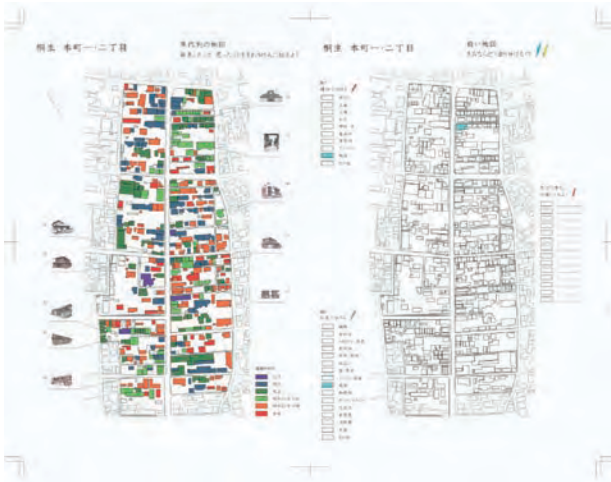
かたち、大きさ、折り込みの工夫



一コマの例 左上に建物の魅力、右下に「年齢」



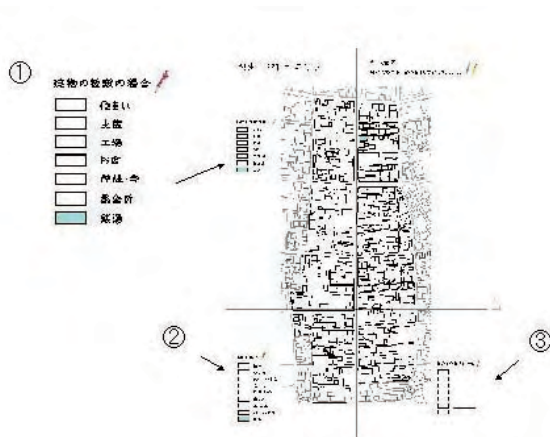
全体をひろげたときの表面



全体をひろげたときの裏面



裏面左 年代によって色分けし、表面の建物の位置を示す



裏面右 まちを歩いて自分で色分けする白地図

6. 子供向けの町並みガイドの制作

3年の皆川佳代です。私は子ども向けの町並みガイドの制作を報告します。

「子供版」のきっかけ 最初に始めたデザイン集制作のほかに、子どもたちにもっと桐生のまちのを知ってもらいたい、興味を深めてもらいたい、という目標をもつ「子ども向け冊子」を作りたいという話しが持ち上がってきました。地元の小学校の先生たちからだったと聞いています。

それを、主に私が担当することになりました。「子供向け」の内容を考えると、どこから始めたらいいか、戸惑うことばかりだったのですが、まずは子どもたちが興味をもってくれるにはどうしたらいいかということから考えはじめました。

冊子の形に工夫があると目に留まりやすいのではないかと思います、家の形やのこぎり屋根の形にしてみようかなど、様々に考えてみました。最終的に、桐生を自分の目でみて体感してほしいという気持ちから、また、まちを実際に歩いてほしいと思い、リーフレットのような形にしてみるというのではないかといいのではないかといいという案になりました。歩きながらでも見やすいものにしようということになったのです。

子供版ガイドに載せた建物たち 紙のサイズは大きく広げたとき、縦270ミリ、横360ミリになります。ちょうどA3に入るくらいです。折りたたんだときには90ミリの正方形になり、規格のケースに入れることができます。ケースから出したり折りたたんだりする動作をつくることにより、子供たちに楽しんでもらえるのではないのでしょうか。

表面は、^{おもてめん} すごろくのように1コマ1コマ分かれていて、1コマに1軒ずつ入っています。右下に建物の年齢が入っているので、ひとつ一つの建物がどのくらい前に建ったのが子どもたちにもわかりやすいようになっています。「ここに住んでいるおじいちゃんが何歳くらいのときに建ったんだろう」というように、住んでいる人の年齢と比べることもできます。

左上には、私たちが考えた建物の呼び名が入っています。

右上の番号は、裏面の地図に位置を示すために、全体の左上のコマから付けています。

ここに挙げた建物は、表通りに面したもののばかりでなく、また大小や新旧に関係なく、この桐生本町一丁目、二丁目らしく、生活のにじみ出ている建物を取り上げてみました。これまでの、桐生のまちを紹介したパンフレットには載っていない建物たちが入っていますので、新しい発見につながると思います。

裏面の地図の使い方 裏面には、桐生一丁目、二丁目の地図を載せました。まちを隅々まで歩いてもらいたいという気持ちから、地図はきっと必要だと思いました。

地図は、左右ふたつあります。左半分の色が入っている方は、年代別の色分けがなされています。そして、表に出ている建物をここでも小さく載せて、どこにあるのかわかるようにしています。

右のまだ何も塗られてない方は、みなさんに塗ってもらいたいと思い、白地図のままです。例題があるとわかりやすいと思い、種類にわけて塗ることができるよう、色分け例をふたつ挙げました。建物の種類別に塗るもの、お店の種類別に色分けしてみるものなど。わかりやすいように、銭湯を例に塗ってあります。この色分け作業は、デザイン集を先に見てもらおうといういろいろなことがわかるので、ぜひ、ふたつの冊子をいっしょにもってほしいと思います。

この冊子は、子ども向けと言っていますが、大人も子どもも楽しめたらいちばんうれしいです。文化財のことや町並み保存や、そしてもっと身近な、ものを大切にすることを考えるきっかけになったら、成功だなと思います。(皆川)

7. 現地調査の合宿生活

2年の渡邊かおりです。私は今回初めて文化財調査に参加しました。

初めて実測に取り組む 桐生での調査は、私に現場での調査経験がまったくないため、私がちゃんと役に立っているのか、桐生のまちの方々とうまく接することができるのか、調査の図面を描くことができるのかと、不安な気持ちでいっぱいでした。

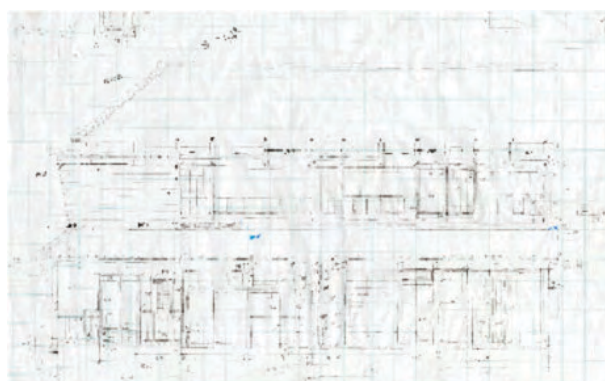
私が現地で初めて担当させてもらったのは、桐生市の象徴でもあるノコギリ屋根工場の鉄扉のディテールでした。いかに細かく正確に特徴を写した野帳がとれ



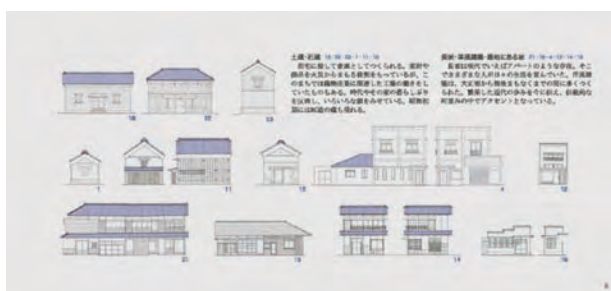
担当したノコギリ屋根工場



二丁目角の二階建の長屋の実測



同上の野帳



デザイン集に掲載された同上の長屋(左下)



朝の桐生本町一丁目付近



子供のいる風景 ノコギリ屋根工場の前で



聞き取り調査（早川禎三さん）

るかが大切だと、先輩たちは私に教えてくれたものでした。始めてみると、ディテールを野帳にとるのは私に向いているらしく、とても楽しんで作業をすることができました。

次は、裏通りにある平屋の長屋でした。ノコギリ屋根の鉄扉とは勝手がちがったのですが、最初はそれに気がませんでした。鉄扉の要領で描いていったら、その長屋を野帳の紙に描ききれなくなってしまったのです。新しく別な用紙に描き直しました。

その次は、表通りの二丁目の角にある二階建の長屋でした。実測がなかなか終わらず、見通しもたてることができず、結局、三回の調査を通してようやくできあがりしました。この長屋は4戸分の規模でとても規模が大きく、何回か改築を繰り返しているようですが、現在はお洒落なフランスレストランやデザイナーのお店が入って使われています。

少しずつ形を変えながらも活用され、桐生の街並みをつくっている歴史をもった建物たち。このような調査に参加させていただき、自分の力にもなり、自分がこれから何をしていきたいのかが見えてきたように思いました。これからも現場調査に積極的に参加し、実践で学んでいきたいと思います。（渡邊）

2年の橋沼真子です。私は合宿生活を通して学んだことを話させていただきたいと思います。

まちの人々が語る 私は桐生で生活している人達と、顔と顔を向き合わせ、目を見て話す機会を多くもらいました。桐生を訪ねたのは数える程しかありません。しかし、私に自分の町内のことをお話してくれた時の、皆さんのあの嬉しそうな表情を今でもよく覚えています。

町並み保存や古い建物を残してゆきたいという願いは、そこに住んでいる多くの人達の思いなしにはありえないこと、ここにきて実感しました。桐生の話をしてくれる方に出会うたびに、なんて誇らしげにお話してくれるのだろうと何度感じたことか。住民の皆さんがどれほど桐生の町を愛し、誇りに思っているかを教えてもらいました。自分のまちの為に、自分たちに何が出来るのだろう。そのことを皆さんで日々思索している様子が、桐生のまちのあちらこちらで感じるこ

ができました。

今回はほんの一部の方としかお話できなかったのですが、もっともっと沢山の桐生のお話を、住民の皆さん一人ひとりが持っているに違いありません。もっともっと私はそのお話が聞きたいです。大人が持っている話を、この町の未来を背負って立つ子ども達にしてあげる。そうした大人と子供とのコミュニケーションを通して、この町の子どもたちは、自分の町について改めて考えるきっかけがつかめるのだと思います。私はそういったコミュニケーションが、これからの町並み保存に必要なことだと、桐生を訪ねて学びました。

たくさんお話をきかせていただき、ありがとうございました。(橋沼)

1年の三井創史です。桐生市出身の私は、桐生で新たに知ったことを報告したいと思います。

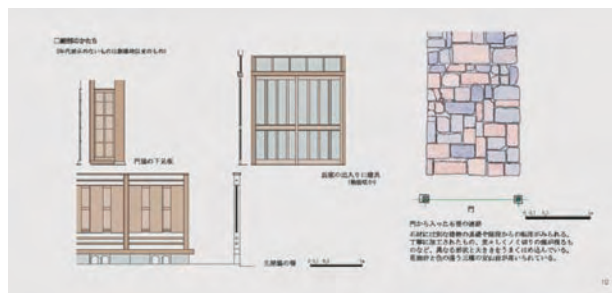
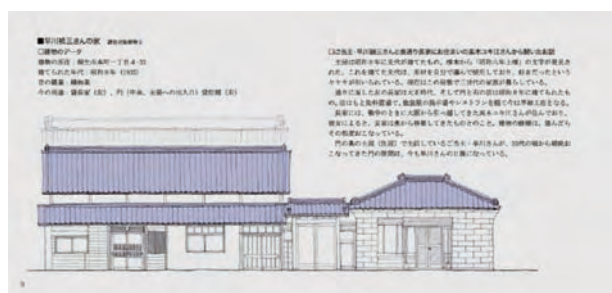
知らなかった桐生 桐生で育った私は、高校生のとき、本町にあるイマジンという塾に自転車で通っていました。その帰り道である本町通りの風景は、日常そのものだったのです。その時はなんの関心ももっていません。今回、この調査を通じて本町一丁目、二丁目の歴史と、そしてなによりも現在までこの町を守ってきた町の人たちの努力を知ることができました。

桐生出身ということでこの調査に呼んでもらい、まずはじめにもらった仕事は、路地裏のすべての写真を撮りながら祠や井戸を探すと調査でした。いくら通い慣れた場所でも、裏に何かあるかまでは知らず、本町中を走り回っているうちに、このまちの違う一面を見ることができました。路地裏は静かで、建物の合間から光が差し込み、そこにたたくむ祠や井戸は路地をいっそう引き立たせていました。

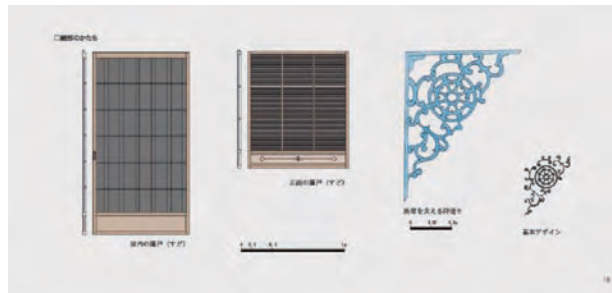
その後は、表通りの建物の実測をおこなっている先生や先輩たちの手伝いで、脚立を運んだり足下を支えたりする仕事をしていましたが、先輩たちの仕事ぶりを見入っているうちに、自分でも同じ作業がしたくなり、頼み込んで実測の仕事をもらいました。そして、店の脇に立つ門の実測を任せられました。ところが、そう簡単ではありませんでした。一日かけても終わらず、夕方には疲れ果ててしまいました。先輩たちのテキパ



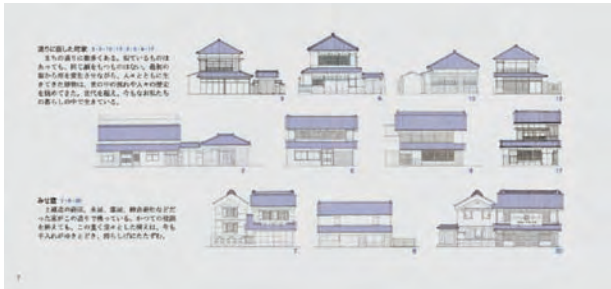
デザイン集 表紙



早川禎三さんのお宅の頁



曾我嘉子さんのお宅の頁



町家、店蔵の頁



鬼瓦、棟積み



鉄扉・持ち送り、土蔵扉の頁



キした行動についていけず、足を引っ張ってしまったようです。

そんなとき、まちの人が声をかけてくれることだけでも励みになりました。ぼくの最初の作品はこのような小さな建物でしたが、いつかは先輩たちが取り組んでいるような大きな家を任せてもらえるように頑張りたいと思っています。そして桐生で育ったことをこれから先、役立てたらいいなと思います。(三井)

8. まとめ

大学院修士1年の田中温子です。私はデザイン集全体についてお話をさせていただきます。

デザイン集の目的 このデザイン集は、今後の修理・修景、新築をおこなう際の基礎資料となることを目的としています。かつての織物産業で栄えた桐生のこれまでの歴史を語る建物が、現在多く残されています。今後も人々が生活し続けるためには、修理・修景、新築といった行為は避けることができません。どのように使われ、どのような目的でそのデザインが用いられているのか、さまざまな面から検討し、本物を継承する必要があります。これまで培われた歴史の上に、これから新たな歴史を重ねて、人々とともに生き続けるまち並みをつくり出すために役立つようなデザイン集をめざしました。

そのため、桐生本町一丁目、二丁目のまち並みをつくり出している一般的な建物を対象とさせていただきました。本町通りに面しているものだけでなく、横丁、路地や屋敷内にある建物、それらに付随する塀や門など、さまざまなものを取り上げることで、桐生の特徴を示すことができたと思います。また、建物を所有されている方々からの聞き取り調査を行ったことで、より深みのあるデザイン集になるのではないかと思います。

先に報告した、子供向けガイドと合わせて、幅広い年代の方々間で交流が生まれ、まちを考えていくことのきっかけになればうれしく思います。

手探りだった調査 今回の調査は、桐生のまちにとって新しい取り組みもあり、私たちにとっても初めての経験でした。慣れない部分が多くあり、みんなが手探りだったといえるでしょう。長岡と桐生、この決して

近くない距離を行き来することも容易ではなく、気候の違いに戸惑うこともありました。しかし、みんな回を重ねるごとに成長し、楽しみながら作業をすることができました。

朝早くから夕方暗くなるまで行った作業は、楽なものではありませんでした。しかし、まちの方々から温かい声をかけていただいたり、多くの差し入れをいただいたり、そのような出来事が私たちの糧となり、今回の成果を発表することができたのだと思います。

実測調査や聞き取り調査等で、お宅にお邪魔させていただくこともあり、いろいろご迷惑をおかけしたと思いますが、私たちにとって学ぶことが多く、とてもよい経験となりました。これを、各自のこれからの生活や研究に活かしていきたいと思います。

最後になりましたが、森さん、大内さんをはじめとする「本一・本二まちづくりの会」のみなさま、調査の対象とさせていただいた建物所有者のみなさま、桐生工業高校の佐々木先生、桐生市都市計画課・文化財保護課のみなさま、調査を進めるにあたり多大なお力添えをいただいたことを心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。(田中)



デザイン集 裏表紙

受託事業名：

富曾亀小学校統合50周年記念事業モニュメント制作

発注者：富曾亀小学校統合50周年記念事業実行委員会

受託期間：平成17年6月1日～平成17年11月6日

プロジェクト主査：赤沼 潔

プロジェクトメンバー：大桃 洋三、白石 晃一

プロジェクトの背景

富曾亀小学校統合50周年記念事業をより意義深いものにならしたいと、富曾亀小学校PTA会長小林和幸氏を通して下記の内容で依頼があった。

- ・50周年記念像の制作に関わって欲しいこと。
- ・作品は変化に富んだもので、子供たちが毎日楽しみに見に来るようなものにして欲しいこと。
- ・制作の工程や状況を子供たちが見ることができ、ものづくりの楽しさを体感させて欲しいこと。
- ・制作過程全体を「事業」、「造形大生と児童の教育の場」と考え、交流の中から地域の歴史、小学校の理念等を互いに学び、作品に反映すること。

このような内容を含んだ、「世界に一つだけしかない富曾亀小学校のシンボル像」を制作して欲しいとのことであった。ものづくりを通して子供たちと触れあい、新たな体験のもと子供たちの教育に側面から協力できると考え制作を実施することとした。

プロジェクトの概要

モニュメントを制作する前に、基本構想の確認を行い、イメージの共通理解を計る。現地視察、確認。作品イメージのエスキースを複数制作しプレゼンテーションを実施する。最終イメージ確認後、子供たちにも制作に関わってもらい、モニュメントの一部を制作してもらおう。それらを含め、制作し富曾亀小学校に設置するまで実施。

プロジェクトの実施経過

初回の打ち合わせの後、1回目のエスキースを実行委員会に提出。大きな方向性を確認後、それをベースとして再度十数点のエスキースを提出し、100人前後くらいの保護者の方々にプレゼンテーションを実施する。候補を3点に絞り、その中から子供たちの投票で最終の1点を選び決定する。設置場所の確認をする。当初はグラウンド寄りの敷地の奥のほうに考えられていたが、中央の中庭に決定する。夏休みを利用し、子供たちにモニュメントの部品鋳造を実施してもらおう。全校児童で実施したかったがマンモス校であるため、6年生94名に絞って実施した。暑い中嬉々として鋳造に熱中していた。それに児童それぞれの名前を刻印し、



子供たちによるモニュメントの部品づくりの状況



子供たちの作った鋳造部品に名前を刻印



部品完成の記念撮影（2列目左が富曾亀小学校佐藤教頭先生、左から4人目が小林PTA会長）

モニュメントに組み込んで溶接、全体像を形づくる。全体像のイメージは、稲穂、蛍、雪を基本としている。稲穂は、富曽亀小学校の田園の風景から、蛍と雪は同小学校の学び舎としての蛍雪の理念から加えて欲しいとのことであった。最終的には稲穂から米のイメージを優先させて制作。終了時、富曽亀小学校佐藤教頭先生、PTA会長小林氏の確認を受ける。現場に設置。基礎部分、銘板は実行委員会に依頼し、見事なものを制作していただいた。除幕式を児童代表者で実施し、他の児童は教室で参加するといった全学的なもので児童の喜びが直に伝わってきた。

プロジェクトの成果

子供たちとのコラボレーションでモニュメントを完成することができ、ただ一方的に作って終わりといったものではなく、より深い内容で制作することができた。今後の展開の参考になればと思う。

モニュメント詳細

本体 アルミニウム (AC7A) フラン樹脂型 casting、開放吹き。溶接接合。線材部分研磨仕上げ。
W600 × D1,000 × H1,900 (mm)



組み立て工程と小林PTA会長の確認状況



1年生から6年生の代表による中庭での除幕式の様子



「希望」と命名し、設置したモニュメント

受託事業名：

RtoR露光機、両面自動露光装置及びマスク外観検査装置デザイン制作業務

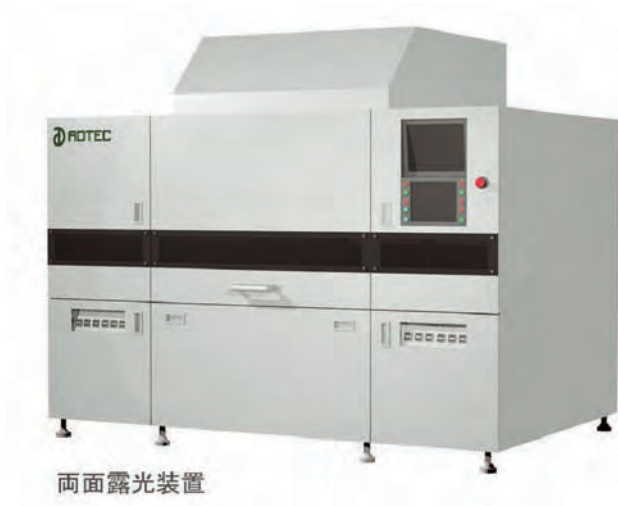
発注者：(株)アドテックエンジニアリング

受託期間：平成17年10月24日～平成17年12月7日

プロジェクト主査：土田知也

概要

これらの機器のデザインは、自動露光装置で試みた黒い横帯を通すデザインアイデンティティを踏襲して行われたものである。なお、これらの機器は韓国のメーカーのOEMである。デザイン案を以下に掲載する。順次、製品化される予定である。



受託事業名：

包丁研ぎ器デザイン設計業務

発注者：(株)片岡製作所

受託期間：平成17年11月18日～平成18年1月31日

プロジェクト主査：境野 広志

プロジェクトメンバー：シェランガスキーひかり・長島菜々枝・遠藤祥代・斎藤知・星野達也

委託内容

現在の包丁砥ぎ器のリニューアルモデルとして、新たなデザイン提案を行う。条件としては、大型の砥石を3組（粗砥、中砥、仕上げ砥石）収容できること。包丁の角度を一定の範囲に保持できること。しっかり押さえられること等である。

成果物として、3Dレンダリング、デザイン（外観）図面、モックアップモデルを作成する。

研究活動経緯

11月07日 第一回打ち合わせ（依頼内容、条件等確認）

（作業）アイデアスケッチ展開

11月30日 第二回打ち合わせ

（アイデアスケッチプレゼンテーション）

（作業）5案に絞り込み、アイデア展開

12月22日 第三回打ち合わせ

（アイデアスケッチプレゼンテーション）

（作業）案修正及びモックアップ制作（4案）

01月23日 第4回打ち合わせ

（モックアッププレゼンテーション）

（作業）モックアップ修正及び3Dレンダ、デザイン図面制作（2案）

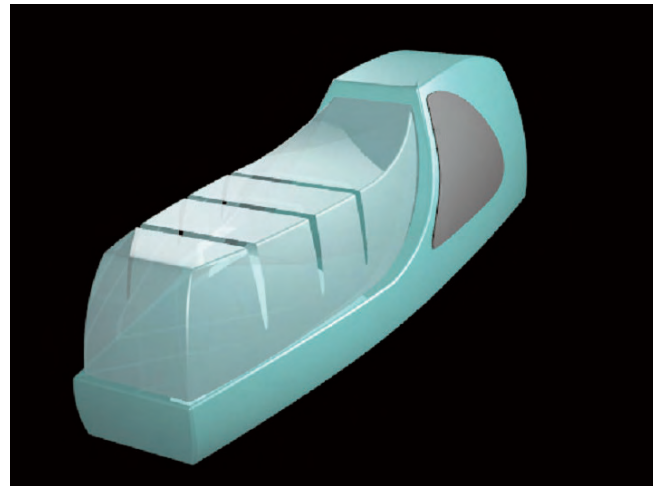
02月03日 第5回打ち合わせ（最終プレゼンテーション、資料提出）

研究成果

次の2案について、モックアップモデル、3Dレンダリング、デザイン図面を提出した。

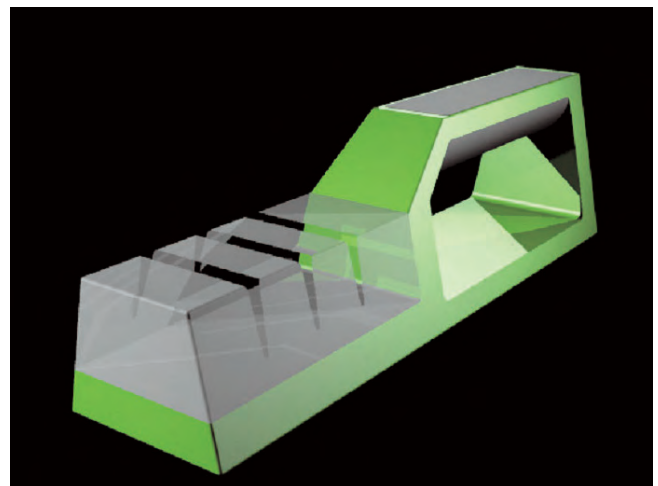
案1 グリップと砥石部に一体感を持たせたタイプ

- ・グリップの滑り止めに別の樹脂を使い、造形上のポイントとした。
- ・前後を絞り込み、幅、高さをコンパクトに見せた。



案2 直線的構成で、耐久性、安定感を強調したタイプ

- ・グリップの開口部を広げ、下部には丸みを持たせ、グリップ性を向上させた。
- ・グリップの部分に別の樹脂を使い、滑り止めとした。
- ・本体下部を広げ、安定しやすい形状とした。



受託事業名：

新型介護ベッドデザインコンサルタント指導業務

受託者：末広産業株式会社

受託期間：平成18年1月1日～平成18年3月31日

プロジェクト主査：土田知也

プロジェクトメンバー：遠藤祥代 齊藤友

(1) はじめに

介護保険の実施以来、介護・福祉用品市場の成長は著しいものがある。その中でも介護用ベッドはフランスベッド、シモンズ、パラマウントなどのベッドメーカーや医療・福祉機器関連メーカーなどが数多くの製品を販売しており、競争の激しい製品のひとつである。

各社により若干の違いはあるものの、電力によるベッド自体の昇降機能と起き上がりを補助する背上げ機能、転落防止柵の取り付けが可能であること、などが共通の特徴である。その他各部の寸法、重量などが「電動介護用ベッドの認定基準及び基準確認方法」が製品安全協会により定められており、この基準を満たさないと保険の対象とならない。

(2) 本事業について

本受託事業は2種類の介護用ベッドのデザイン開発であり、一つは病院、介護施設用、もうひとつは一般家庭用を前提にしたものである。前者は介護者の肉体的な負担を減らすためベッドの高さが70cmと高い。後者は通常のベッドと同じレベルの高さである。

いずれも最大の特徴は背もたれが上昇するのみならず、脚を支える部分が下降して、完全に椅子の様な形態になることであり、介護者にとっても介護される側にとっても、より快適で安楽な離床動作、車椅子への移乗動作が可能になる。

両方とも基本的な構造は完成しており、いずれも斬新で巧みな機構により、一個のモーターでベッドから椅子への一連の変形動作がスムーズに行われる(いずれも特許出願済み)。前者は群馬大学医学部などと共同開発されたものであるが、後者は全くの自社開発である。

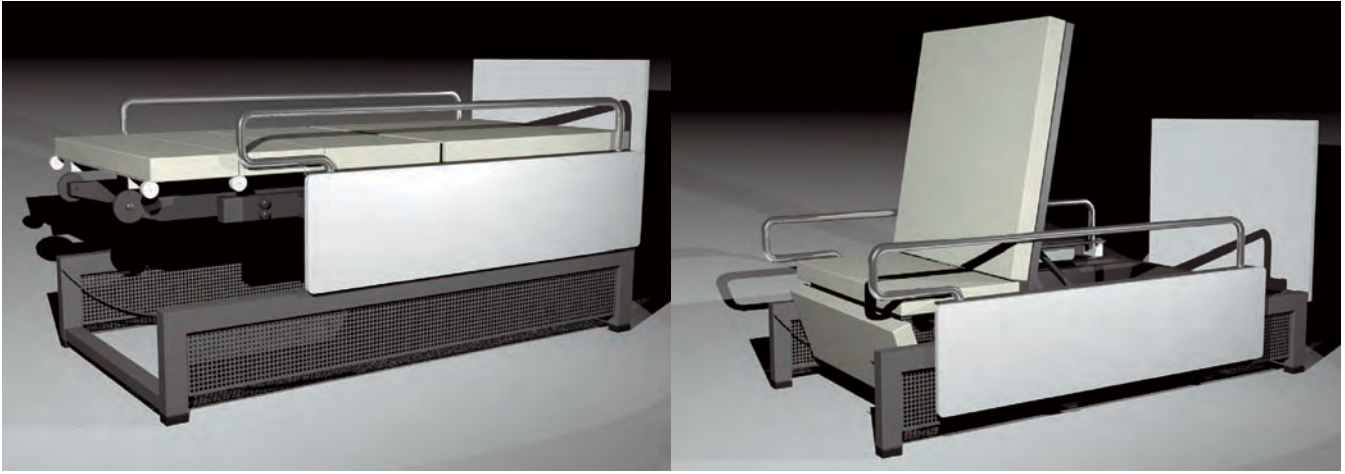


左：病院介護施設向け 右：一般家庭向け 構造実動モデル

(3) デザイン案

1) 病院・介護施設向け

アーム、ジョイントが複雑なため手を挟む危険があり、また、全体に重量も過剰である。したがって、安全性の確保と軽量化が大きなテーマとなった。手を挟む危険性がある複雑なアームなどを、木質系のパネルで隠してしまうこと、側面の鉄板は鋼管と薄手のパンチングメタルの組み合わせに変更した。



2) 一般家庭向け

現在の介護用ベッドは、細部にわたってよく検討されたものが多いものの、いかにも介護用と感じさせるものが多く、普通の趣味の良いインテリアに何気なく調和するようなモノは見当たらない。シンプルで存在感を主張しない、いわば、無印に置いても馴染む様なデザインの介護用ベッドを目指した。パーツの重量が認定基準を超えていたため、軽量化も大きなテーマになった。



(4) 終わりに

7月の介護・福祉用品関連のフェアで試作機が展示され、その後、商品化へ向けての取り組みがスタートする予定である。

他に類を見ない極めてユニークな介護用ベッドであり、一層の軽量化、細部にわたる安全性の確認、施設なのでの実用試験、などまだ越えなくてはならないハードルは多いが、基本的な発想が非常に優れているだけに試作で終わらせることなく、商品化へと結び付けていきたい。

受託事業名：

『アルビレックス新潟』の選手を起用した新潟日报社コマーシャル制作業務

発注者：新潟日报社

受託期間：平成17年4月5日～平成17年5月14日

プロジェクト主査：瀧 純男（非常勤講師）

プロジェクトメンバー：平成17年度視覚デザイン学科4年生

委託内容

本プロジェクトは、新潟日报社よりJリーグアルビレックス新潟の選手を起用したコマーシャルの制作依頼を受けて取り組んだものである。

制作にあたり、17年度視覚デザイン学科4年生から数十名を募り、3グループに分かれて各グループから1作品を出してもらうこととした。制作全体を通して、プロジェクト主査のもと学生が主体となってプロジェクトをすすめていった。

各グループから出された作品はA班「矢印篇」、B班「ハッシン篇」、C班「テッペン篇」であった。3つの案全て新潟日报社の担当者にプレゼンテーションし、その結果C班の「テッペン篇」が採用されることとなった。

採用された作品は、新潟県内の民放局（BSN、Ten y、NST、UX）や新潟駅構内のメディアステーションbanana、またアルビレックス新潟ホームゲームの際のビッグスワンメインモニターで放映されることとなった。放映期間は、ビッグスワンではアルビレックス新潟のホームゲームが実施される平成17年3月12日から12月3日までと、平成18年3月11日から12月2日までであり、テレビ、メディアステーションbananaでは、現在（2006年9月）オンエア中である。

実際に採用された「テッペン篇」のカット写真の一部は右のとおりである。

（今回制作にあたった非常勤講師 瀧 純男及び学生たちは、前年度に「AC（公共広告機構）」の主催する「公共広告CM学生賞」に、コマーシャル演習という授業の課題を通してエントリーし、見事グランプリ（最優秀賞）及びBS賞（優秀賞）を受賞したメンバーである。この受賞をきっかけに、新潟日报社より広告制作の依頼を受けたもの）



3. 地域デザイン活動支援

(1)「新潟ビジネスメッセ2005」参加出展

開催日：平成17年11月10日(木)、11日(金)

会場：新潟市産業振興センター

主催：新潟市、(財)新潟インダストリアルプロモーション協会、(財)新潟地域産業振興センター、新潟ニュービジネス協議会、(財)にいがた産業創造機構

当展示会は、幅広い分野においてビジネス提案を行える企業等を全国から募集し、毎年開催されるものである。デザイン研究センターでは、産学間の交流を目的として「大学等研究開発・支援コーナー」に出展し、平成16年度受託プロジェクトに関するパネル及び製品を展示した。

(2)「にいがた産学交流フェア2005」参加出展

開催日：平成17年12月6日(火)

会場：ハイブ長岡

主催：(財)にいがた産業創造機構、関東経済産業局

当展示会は、県内の企業等と大学等の交流を通し、産学連携による新技術・新産業を創出することを目的に毎年開催されるものである。デザイン研究開発センターでは、当展示会の協力機関としての後援を行い、「大学における産学連携コーナー」にて平成16年度受託プロジェクト成果品などを展示した。

(3)「OMIAI part 」参加

開催日：平成17年10月18日(火)

会場：万代シルバーホテル

主催：新潟市異業種交流研究会協同組合

当イベントは、「『産』の需要を『官』の支援で『学』と形にする」という副題のもと、文字通り産官学連携の出会いの場を設け、企業の発展の動機付けにすることを目的としている。デザイン研究開発センターは、昨年度に引き続き参加し、センター長による「企業のCI戦略/ブランディングとVI戦略」についての発表を行った。

(4)北越銀行との産学連携協力に関する協定締結

地域企業等の支援及び産業振興により、地域社会の発展に寄与することを目的に長岡造形大学と企業等と

の産学連携の仲介を(株)北越銀行が担う旨の「産学連携協力に関する協定」を平成17年12月22日付けで締結した。この協定により、(株)北越銀行の店舗において技術相談の申込みを行うことで、内容により本学へのデザイン相談、受託研究などの依頼につながることになる。

4 . 技術相談・センター広報・学外委員会活動・その他

(1)「長岡巾着まつり」イベント制作

発注者：長岡野菜ブランド協会

デザイン/監修：福田 毅

長岡野菜「長岡巾着なす」の本格的な長岡での産地化に向け、食文化の継承と若者をターゲットとした消費拡大の推進を目的に「第1回長岡巾着まつり」が長岡中央青果市場を会場に開催された。イベントでは、野菜即売会、各種店舗出店、試食コーナーなどが行われ、多くの市民が会場に訪れた。

イベントの総合プロデュースを福田が行い、マスコットキャラクターやロゴタイプのデザインを制作し、各種サイン、ビニール袋、Tシャツなどに使用された。

長岡 巾着まつり

イベントのロゴタイプ

イベントのビニール袋

イベント当日の様子
(JA越後ながおかHPより)



(2) 長岡市共通商品券デザイン制作

発注者：長岡市共通商品券協同組合

監修：鎌田豊成、福田 毅

当組合に加盟する長岡市内の店舗での利用が可能であり、贈答用にも広く利用されている「長岡市共通商品券」を市制100周年に合わせデザインを一新し、リニューアルすることとなった。全国的にも画期的なデザインの商品券の運用が広まる中、学生の柔軟な感性を用いたデザインを長岡市でも取り入れたいとの依頼

があり、鎌田及び福田の監修のもと、本学学生を対象としたデザインコンペを行った。

その結果、長岡市のシンボルでもある花火と長生橋を用いた視覚デザイン学科3年山崎智子さん(当時)のデザインが採用され、平成18年5月1日より運用開始となった。



採用デザイン



表彰式の様子

(3) 新型仏壇に関する講演

発注者：白根仏壇協同組合

講演：馬場省吾

「伝統的工芸品」として通商産業大臣の指定を受け、300年の歴史を持つ白根仏壇に新たなデザインを取り入れることを目的に、仏壇職人を対象に講演会を行った。講師は、本学ものデザイン学科工芸デザインコースの担当であり、金属造形作家でもある馬場が担当し、仏壇のデザイン制作の経験などを交え、職人に対しデザインの啓発を行った。

長岡造形大学デザイン研究開発センターについて

デザイン研究開発センターの概要

1. デザイン研究開発センターの設置経緯

デザイン研究開発センター(以下、センターという。)は、平成6年4月1日に長岡造形大学と同時に、大学付属機関として発足し、現在に至っております。

2. センターの目的

センターは、本学の教育研究成果を広く企業等に伝えると共に、企業等との共同研究を推進することにより、本学の教育研究の発展と地域社会における創造的研究開発の推進に寄与することを目的としています。

3. センターの業務内容

センターでは、次の各号に掲げる業務を行っております。

- (1) 企業等との共同研究及び受託研究
- (2) 企業等との技術者に対する高度技術の教育及び研修
- (3) 企業等に対する学術情報の提供
- (4) 企業等の研究開発にかかる技術相談
- (5) 本学の学生に対する実証的な応用研究開発
- (6) その他、センターの目的を達成するために必要なこと

4. これまでの実績

センターでは、平成6年の開設からこれまで年間50件以上のデザイン相談を受け、そのうち契約を伴うプロジェクトの受託件数は延べ93件を数えます。プロジェクトの委託元を機関別に見ると、センター開設当初は官公庁中心であった委託元が、近年では民間企業等が大半を占め、平成17年度には7割を超える件数となっています(図1)。また、プロジェクトの委託元を地域別に見ると、センター開設当初は長岡市内中心の委託元が大半を占めていましたが、徐々に新潟県内外からの委託が増加し、平成17年度には新潟県内からは約5割、新潟県外からは約3割を占める件数を受託しています(図2)。

近年、長岡市内をはじめ新潟県内外の企業等においてデザインの重要性に対する認識が高まり、センター

に寄せられるデザイン相談の件数も増加しています。これからも広くデザイン相談を受け付けますのでお気軽にご相談ください。

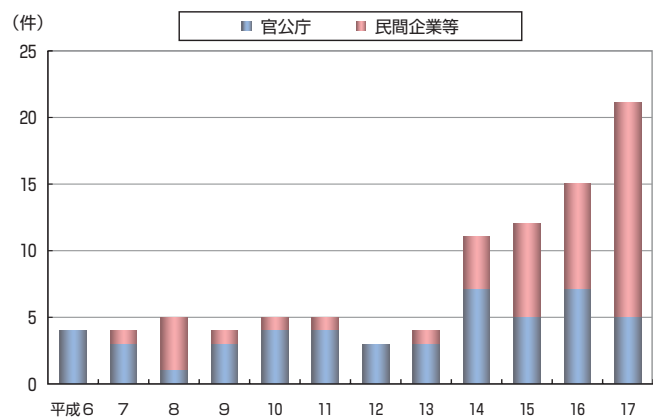


図1 機関別プロジェクト数

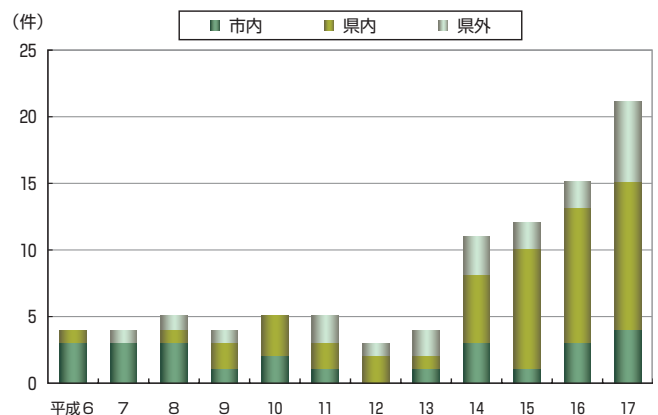


図2 地域別プロジェクト数

5. デザイン相談の受付

長岡造形大学デザイン研究開発センターでは、寄せられたデザイン相談の内容に応じて様々なメニューを用意しています。ご相談は以下のように本学にて対応いたします。

デザイン相談の受付

デザインに関する相談は、電話・FAX等で長岡造形大学総務課にて随時受け付けています。

電話

▶ まずはお気軽にお電話下さい。 TEL 0258-21-3311(代)

FAX・Eメール

▶ 「デザイン相談申込用紙」にご記入いただきFAX又はEメールにてお送りください。

FAX 0258-21-3312

Eメール d-center@nagaoka-id.ac.jp



内部協議 ～ 両者打合せ

頂いた相談内容をセンターで把握し、お打合せにて詳細内容を再度お伺いいたします。その後、ご相談内容に沿った最も適当な方策をご提案いたします。以下が主なメニューとなります。



①受託研究・委託によるデザイン提案

委託契約に基づき、担当する教員が調査研究又はデザインを提案いたします。メンバーには学生も参加します。

②外部デザイン事務所の紹介

ご相談内容に応じて外部デザイン事務所を紹介いたします。

③学生コンペ

学生に広くデザイン案をお求めの場合は、本学学生を対象に学内コンペを行ないます。

④教員による専門的アドバイス等

デザイン全般に関して専門的知見からアドバイス及びコンサルティングをいたします。



「①委託によるデザイン提案」の場合、以下のとおり業務が進行いたします。

主査の決定 ～ 業務委託契約

ご相談内容に応じて本学教員の中から適任者（主査）を決定します。業務の方法、期間、予算等について、両者で協議を重ね、業務委託契約を締結し、業務がスタートします。ただし、授業その他の学事が優先されますのでご了承ください。



成果物の提出・業務終了

成果物を提出し、委託元の検収後、業務終了となります。

6. センターの担当教員

長岡造形大学の全教員は、デザイン研究開発センターの諸プロジェクトの担当教員であり、各自の専門・研究分野の特性に応じて、プロジェクトに関与します。

なお、以下に本学教員の氏名と専門分野を示しますのでご参照ください。(注：職名及び専門分野は平成18年9月1日現在を掲載しています。)

| 氏名 | 専門分野 |
|-----------|--------------------------|
| 教授 鎌田 豊成 | グラフィックデザイン、広告 |
| 教授 石原 宏 | 西洋美術史 |
| 教授 岩田 俊雄 | グラフィックデザイン、広告 |
| 教授 上野 裕治 | ランドスケープ計画・設計、植物生育環境、緑地環境 |
| 教授 木村 勉 | 建造物保存修復 |
| 教授 熊井 恭子 | テキスタイルデザイン |
| 教授 小泉 均 | グラフィックデザイン(タイポグラフィ) |
| 教授 洪 起 | 耐震工学、信頼性工学 |
| 教授 後藤 哲男 | 建築・都市設計 |
| 教授 小林 誠 | 金属工芸(ジュウリーデザイン) |
| 教授 菅原 浩 | 比較文化論、表象文化論 |
| 教授 鈴木 均治 | テキスタイルデザイン(染色) |
| 教授 土田 知也 | 工業デザイン |
| 教授 馬場 省吾 | 金属工芸(鍛金造形) |
| 教授 飛田 範夫 | 日本庭園史 |
| 教授 平井 邦彦 | 都市防災 |
| 教授 平山 育男 | 建築史 |
| 教授 福田 毅 | グラフィックデザイン、広告全般 |
| 教授 松丸 武 | インダストリアル・デザイン |
| 教授 森 望 | ディスプレイデザイン |
| 教授 森田 守 | デザイン/意匠行政論、意匠法 |
| 教授 山下 秀之 | 建築意匠 |
| 教授 和田 裕 | プロダクトデザイン |
| 助教授 境野 広志 | 工業デザイン |
| 助教授 新海 俊一 | 建築計画、建築設計、情報科学 |
| 助教授 高崎 賀朗 | 現代絵画(油絵、シルクスクリーン) |
| 助教授 長瀬 公彦 | グラフィックデザイン、イラスト |

トレーション

| | |
|---------------|---|
| 助教授 真壁 友 | デジタルデザイン、メディアアート |
| 助教授 ヨールグ ビューラ | 視覚デザイン、マルチメディア、アート教育 |
| 助教授 渡邊 誠介 | 都市計画 |
| 講師 吉川賢一郎 | グラフィックデザイン |
| 講師 小林 花子 | 彫刻 |
| 講師 澤田 雅浩 | 都市計画、都市防災 |
| 講師 藤澤 忠盛 | 建築デザイン、空間デザイン、映像デザイン |
| 講師 アンドリュウ バン | ゴースム TESOL - Teaching English to Speakers of Other Languages |

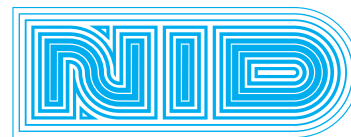
長岡造形大学デザイン研究開発センター
平成17年度活動報告

長岡造形大学
デザイン研究開発センター
940 - 2088 新潟県長岡市宮関町197番地
TEL . 0258 - 21 - 3311 (代表)
FAX . 0258 - 21 - 3312

長岡造形大学ホームページ
<http://nagaoka-id.ac.jp/>
Eメールアドレス
d-center@nagaoka-id.ac.jp

Desined by Kenichiro Kikkawa 2006

デザイン相談申込書



長岡造形大学
 デザイン研究開発センター
 TEL 0258-21-3311
 FAX 0258-21-3312
 E-MAIL d-center@nagaoka-id.ac.jp

この度は、本学デザイン研究開発センターにご相談いただき誠にありがとうございます。
 この用紙は、ご相談の参考資料として使用いたします。ご自由にご記入いただき、
 FAX又はE-MAILで用紙をお送りください。

| | |
|-----|----------|
| 申込日 | 平成 年 月 日 |
|-----|----------|

| | | | | |
|-------------|--------|-----|-------|--|
| 申 込 者 | 企業名等 | | | |
| | 住 所 | 〒 - | | |
| | T E L | | F A X | |
| | ご担当者 | | 部署/役職 | |
| | E-mail | | URL | |

| | | |
|-------------------------|--|--|
| デザイン 相談分野 (複数回答可) | ものデザイン | 建築・環境デザイン |
| | <input type="checkbox"/> 産業機械 <input type="checkbox"/> 電化製品 <input type="checkbox"/> IT機器 <input type="checkbox"/> 日用品 <input type="checkbox"/> 雑貨 <input type="checkbox"/> テキスタイル <input type="checkbox"/> 工芸 <input type="checkbox"/> その他 | <input type="checkbox"/> 建築設計 <input type="checkbox"/> 空間デザイン <input type="checkbox"/> インテリア <input type="checkbox"/> 景観 <input type="checkbox"/> 調査 <input type="checkbox"/> 計画 <input type="checkbox"/> イベント <input type="checkbox"/> その他 |
| | 視覚デザイン | その他 (ご記入ください) |
| | <input type="checkbox"/> 広告 <input type="checkbox"/> ロゴマーク <input type="checkbox"/> アート <input type="checkbox"/> WEB <input type="checkbox"/> CI <input type="checkbox"/> パッケージ <input type="checkbox"/> 映像 <input type="checkbox"/> その他 | |

| | |
|--------|--|
| 内 容 | |
| | |
| | |
| | |
| | |
| | |
| | |
| | |
| | |
| | |

| | |
|------------------|--|
| 業務の形態 (複数回答可) | <input type="checkbox"/> 受託研究・委託によるデザイン提案 <input type="checkbox"/> 教員による専門的アドバイス等 <input type="checkbox"/> 外部デザイン事務所の紹介 <input type="checkbox"/> その他 () <input type="checkbox"/> 学生コンペ <input type="checkbox"/> わからない |
|------------------|--|

| | |
|-----------------|------------------------------|
| 期 間 (スケジュール) | 開始時期： (製品化予定、販売予定等) 終了時期： |
|-----------------|------------------------------|

| | |
|-------|--|
| ご 予 算 | |
|-------|--|

| | |
|-----|--|
| 備 考 | |
|-----|--|

| | | | |
|-----|----------|-----|--|
| 受付日 | 平成 年 月 日 | 受付者 | |
|-----|----------|-----|--|